Tangolandia

春
2015

日本タンゴ・アカデミー会報

（HP：http://tangoacademy.jp/）

－目　次－

わたしのひそかに愛するタンゴ　Marioneta（あやつり人形）…… 高場将美 … 2
私の愛聴盤（第７回）…… 海江田禎二 … 6
タンゴこぼれ話（第３回）　親しみ易い言語ルンファルド …… 弓田綾子 … 12
カンバラーチェ逍遥（第２回）…… 島崎長次郎 … 14
Amigo Horacio Ferrer　また生まれておいで …… 高場将美 … 18
Esa música eterna　永遠の音楽（翻訳）…… 弓田綾子 … 20
レオポルド・フェデリコ追悼…… 吉村俊司 … 21
第３回蓄音機（HMV163）を使用したタンゴ名盤コンサートの報告（9/23）… 吉岡達郎 … 23
姫路中南米音楽愛好会創立60周年記念特別会（11/16）…… 鈴木忠昌 … 25
いわき中南米音楽同好会10周年記念に参加して（11/11&12）…… 藤木立夫 … 28
ノチェーロ・ソイ蓄音機SPタンゴ鑑賞記（12/23）…… 西川　薫 … 31
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ　第53回リサイタル（12/27）…… 笠井正史 … 36
奈良タンゴ祭（2015/1/10）…… 和田ひろみ・吉澤義郎 … 39
海を渡ったポルテーニョたちの足跡　補遺１　ラファエル・カナロ…… 齋藤冨士郎 … 41
バンドネオンの名前と由来　背景と影響…… 舳松伸男 … 44
タンゴエッセイ　人生はタンゴと共に…… 松野初美 … 46
曲が先か‥　ストーリーが先か…！ …… 寺本千栄子 … 49
『白夜のタンゴ』が語るもの …… 櫻井征夫 … 52
ブエノス・アイレスの夜　聴いて、踊って…… 佐藤　進 … 56
会員アンケート「私の好きなChiqué ３曲選」（第３回発表）…… 60
新・訳詞コーナー「Maipo」…… 大澤　寛 … 63

わたしのひそかに愛するタンゴ

マリオネータ（あやつり人形） Marioneta

高場　将美

わたしは18才のころから、学校が休みの日を除いて、ほぼ毎日、数時間はタンゴを聴いてたが――授業にはほとんど出ていない――、それはタンゴ喫茶《ミロンガ》に通っていたからで、曲名もアーティストの名前もほとんど知らなかった。家にはレコード・プレイヤーはなかった。そのうちに、いちばん安いプレイヤーを買った。

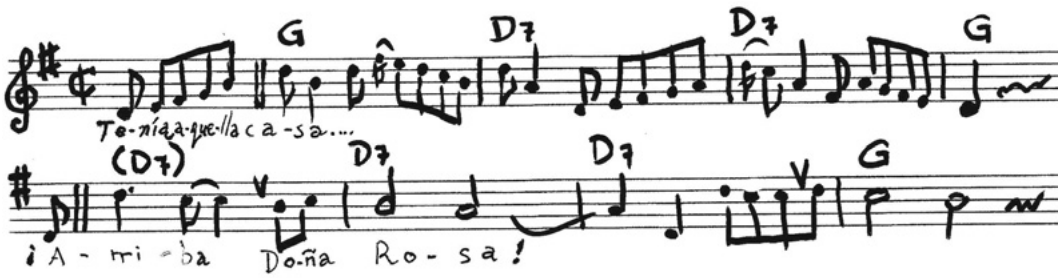
《ミロンガ》で、すてきなものをいくらでも聴けるので、自分の家でレコードをかける必要はなかったけれど、東芝レコードのＥＴＰ（エル・タンゴ・ポルテーニョ？）クラブとかいうものの会員になると、定期的に特別レコード（市販はしない）をくれるというので、それが歌のレコードだったので、うれしいな！……とプレイヤーを買ったのだった。歌のレコードは日本では商品価値ゼロなので、まったく（というと少し誇張だが）発売されていなかった。わたしが最初にもらった会員特典レコードはコルシーニ Ignacio Corsini の『ジーラ・ジーラ　Yira... yira...』（もう１曲の題は忘れた）が入ったシングル盤――これが最初で最後。クラブは会員不足で自然消滅したらしい。

プレイヤーがあるので、時たま、自分でレコードを買うようになった。タンゴの新譜はほとんど発売されていない時代だった。たとえ発売されても、わたしの収入ではまったく買えなかった。買えなくてもまったく悲しくなかった。くどいようだが、《ミロンガ》でいくらでも聴けたから。

《ミロンガ》のあるのは古本屋街で、古レコード屋も少しあった。古レコードの中でもいちばん安いのを、ときどき買った。そんな中に、日本発売の、ガルデール Carlos Gardel が歌う『11時のミサ Misa de Once』があって、たいへん気に入った。スペイン語はちゃんとわかっていなかったけれど、「あのころわたしは20才、あなたは18才で、きびしい女学校に閉じ込められていて、日曜日だけミサのため外出した……」という要旨は感じ取ったので、とても感動した。（この曲の歌詞の一部は、この前のタンゲアンド･エン･ハポン誌の「タンゴ作詞家列伝」に書きました）。

ここでご紹介する『マリオネータ（あやつり人形）』は、『11時のミサ』と同じ作者たちのタンゴである。この曲を「ひそかに愛する」ようになったのは、いつのことか覚えていない。どちらかといえば近年のことで、たぶん、アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani の歌で感動したのが最初の発見だったと思う。題名はずっと前から知っていたが、作者名は覚えていなかった。でも、内容はまったく違うけれど、『11時のミサ』と同じ心の曲だなぁ……と、すっかり気に入ってしまった。

作詞者は**アルマンド・タジーニ Armando Tagini（1906-62）**――彼については、先の「タンゴ作詞家列伝」をお読みください。



作曲者は、フワン・ホセ・ギチャンドゥト Juan José Guichandut（1909-79）。ピアニストだが、プロの演奏活動はしていない。堅い仕事（サラリーマン）のかたわら、タンゴの作曲をした。20曲あまり発表したと思うが、特によく知られているのは、タジーニの歌詞に作曲した『マリオネータ』と『11時のミサ』。そして、1942年に、自分で作詞した『タラレアンド（鼻歌をうたいながら）Tarareando 』がヒット曲になった。ディサルリ楽団／歌：ルフィーノ Carlos Di Sarli/Roberto Rufino、カロー楽団／歌ベローン Miguel Caló/Raúl Berón のレコードが出た。

『マリオネータ』は、1928年のヒット。ほかにもいわゆる名曲が大量生産?!された時期なので、どれが大ヒットか中ヒットか比較はできないが（また、比較することは、よろしくない）、とにかく、この曲は、ガルデール、コルシーニ、マイサーニの３大スター歌手のレコードが、すぐに発売された。

歌詞は、作詞者の子ども時代の追憶から始まる。

Tenía aquella casa no sé qué suave encanto / en la belleza humilde del patio colonial, / cubierto en el verano por el florido manto / que hilaban las glicinas, la parra y el rosal... ¡Si me parece verte! La pollerita corta, / sobre un banco empinadas las puntas de tus pies, / los bucles despeinados y contemplando absorta / los títeres que hablaban inglés, ruso y francés.
（あの家には なんともいえない やさしい魅力があった、植民地時代の中庭の まずしい美しさの中に。夏には、藤棚が織りだす花咲くマントとぶどう棚とバラの茂みに囲まれて。わたしにはあなたが見えるようだ！　短いスカート、ベンチの上に伸び上がった あなたの両足のつま先、乱れた巻き毛。そして あなたが夢中で見つめていた そのあやつり人形たちはしゃべっていた、英語、ロシア語、フランス語で）。

ここまでを、作詞者は、アレハンドラ体 alejandrino という、スペイン語ほかラテン語系の諸言語の文学でもっとも格調高い（とされる）型で書いている。もとはギリシア古典から来たという、この詩体は、14（７＋７）シラブルが１句で、その４句でひとまとまりになるという、長い技巧的なもので、大衆歌謡には凝りすぎ……だけれど、タンゴやポルトガルのファドではそんなに珍しくない。自然にすらすらと歌詞にされている。

ただし作曲家のほうから言わせると、この詩体では、７音＋７音でひとまとまりになる、長い、しかも流れが自然なメロディを作らないといけないので、単調な音楽になってしまう。日本でいうお経みたいなメロディしか作れないのである。

でも、タンゴやファドは、曲によっては、ことばの語り口のほうが大事なので、音楽家には物

足りなくてもかまわない。

さて、エストリビージョ（estribillo　リフレーン）に入る。この部分は、短い７シラブルのフレーズを重ねていくスタイルで書かれ、音楽も躍動することができる。

女の子の声援のことばで、歌詞（そして曲）が活力を帯びる。

—¡Arriba, doña Rosa!... / ¡Don Pánfilo, ligero!... / Y aquel titiritero / de voz aguardentosa / nos daba la función. Tus ojos se extasiaban: / y aquellas marionetas / saltaban y bailaban / prendiendo en tu alma inquieta / la cálida emoción...

（「がんばれ、ドニャ・ローサ（おばさんの人形）！　ドン・パンフィロ（おじさんの人形）、早く早く！」そして あの人形使いは、酒で焼けた声で、わたしたちに芝居を見せた。あなたの両目は恍惚としていた。あのあやつり人形たちは、跳びはね、踊っていた、あなたの感じやすい魂に、熱い感動を植えつけながら）。

ここまでは、懐かしい子どものころの楽しい思い出。……でも、タンゴにはハッピー・エンドはない！　悲しくなければタンゴではない！

２番では、幸せな時代は過ぎたことが歌われる。彼女は、男たちの甘いことばに誘惑されて、誰だかわからないよその男にくっついて家出してしまったと——アレハンドラ体で！——簡潔に語られる。そして……

Allá entre bastidores, ridículo y mezquino, / claudica el decorado sencillo de tu hogar... / Y vos, en el proscenio de un frívolo destino, / ¡sos frágil marioneta que baila sin cesar!

（もうあんな舞台の上では、あなたの家庭の素朴な大道具はばかばかしく、みすぼらしく、押しつぶされている……。そしてあなたは、浮かれた運命の前舞台に立って、休みなく踊っている、こわれやすい操り人形！）

ここでは舞台の専門用語がふたつ使われている。作詞家は、とくに劇場関係の仕事をしてはいないようだが、大衆芸能にかかわっていれば、自然に覚えてしまうことばだったのだろう。また、芝居が（人形芝居だけでなく、ほんものの劇場での芝居も）大好きだったブエノスアイレス人にとっては、常識として理解できることばだったはずだ。

bastidor は、西洋の劇場には必ずあった（いまは必要に応じて取り付けるのだろうと思う）舞台の前方の左右両側に立てられた木製、あるいは金属製の枠で、その上に紙や布を貼って絵などを描き、場面設定を感じさせる大道具の代わりにする。

proscenio は、本舞台の前に付いた小さな舞台で、緞帳が下りても幕前に残っている部分。このことばは、舞台の最前端を指して、今日でも世界中で使われている。日本では英語風に「プロシーニアム」と呼んでいると思う。

人形芝居に狂喜していた彼女は、劇場のダンサーもどきになってしまったのですね。舞台の専門用語なんか知らなかったわたしにも、それは感じることができた。

これは作詞者タジーニの実体験にもとづいた歌詞なのだそうだ。彼が10才のころ、バルバネーラ地区の、ある中庭に、いつも人形芝居を見に行っていた。そこでいちばん熱烈に興奮して見て

いたのは――小さいから、ベンチに立ち上がって――母親が洗濯をして生計を立てているとても貧しい家の６歳の女の子だった。たぶんマリーアという名前だった。

そのうちに人形遣いは来なくなり、時は流れて、彼はもう彼女の姿を見ることがなかった。

アスセーナ・マイサーニ
（右は、カルロス・ガルデールと共に）

彼は20才になって、ある夜、どこか場末のダンスホールへ行った。そこでひょっと見たら、彼女が働いているではないか！　子どものころの面影ははっきり残っていて、間違いなく彼女だった。彼は驚き、話しかけることも恐ろしくなって、すぐに店から逃げ出した。

歌詞ではダンサーと美化（？）されているけれど、いわゆる風俗営業の女給さんになっていたのだ。

この曲でわたしが最初に感動したのは「がんばれ、ドニャ・ローサ！……」の声援のところで、マイサーニがすばらしい表現をしている。もちろん、歌詞も曲も、それまでとは一変して、印象的に作られているからでもある。

マイサーニが決定版だなと思っていたが、まぁ聴いてみようかと、ガルデールをまともに聴いてみた。驚いた！　完全に表現のレベルが違う。

「がんばれ……」の部分は２回歌われるわけだが、ガルデールは最初はもちろん、しあわせいっぱいに明るく浮き浮きと歌う。２回目は、泣きながら歌っているように聞こえる。その他、完全に曲の魂と一体化して、細部まで完璧な語りかた、表現は、他のアーティストとくらべようがない。

このガルデールの歌を子どものころ聴いて感動したフロレアール・ルイス Floreal Ruiz は、後年になって、この曲を十八番にした。

43年のデアンジェリス Alfredo De Angelis 楽団での録音に次いで、翌年トロイロ Aníbal Troilo 楽団、後にバッソ José Basso 楽団でもレコードを出した。アルゼンチンにはフロレアールの熱狂的なファンが多くて、この曲に関してはガルデールより上だと、バカなことを言う人も少なくない。それは「ひいきの引き倒し」というもので、私も相当なフロレアール崇拝者ではあるが、ガルデールと比較すること自体がもうおかしいのである。フロレアールが、だいぶ年をとってからの、サボイ・ホテルでのライヴ録音がネットで聴ける。ドラゴーネ Jorge Dragone が伴奏だが、ピアノがないので電子オルガンを弾いているチャチなサウンド。でもフロレアールの個性は、いやらしいほどよく楽しめるので、聴いてみてください。

コルシーニの録音もいいですよ。何といっても、曲がいいんです。

＊この曲をYouTube で聴きたい方は――
ガルデール：https://youtu.be/TWq91FweZBE
コルシーニ：https://youtu.be/9oI5ULwoWKA
マイサーニ（19曲入り）：https://youtu.be/R2GVI-fD651
ルイス（サボイ・ホテル）：https://youtu.be/XqxWUrdXrxM

私の愛聴盤 ～第７回～

― MAIPO ―

海江田 禎二 （千葉県市原市）

タンゴに馴染みのない知人にその良さを分かってもらう手段として提供している20曲ほどのタンゴ、それが私にとってもお気に入りのタンゴ、すなわち愛聴曲である。私の好みを押し付ける行為かもしれないが、タンゴファンになってもらいたいためには致し方ないと思っている。その中から、私の最愛の愛聴曲MAIPOを紹介させて頂きたい。

Arolasの名作であるこの曲は、LA CACHILAやEL MARNEなど他の大曲に比べると演奏される機会が少ないようだ。しかし私にとって、この曲は数多い彼の名作の中でも最高作ではないかと感じている。疲れた時や、何かに癒されたいと感じる時、あるいは和みたいと思う時、ふと聴きたくなる一曲、それがこの曲である。あまり深刻にならず、演奏に包まれるように聴くのがこの曲の最高の楽しみ方のように思う。

曲構成の第一主題（A）は、高らかに歌い上げるような澄み切った小節から始まる。その明るさが湧き立つように盛り上がりを見せたところで次の第二主題（B）に引き継がれる。それは前主題に比べ陰影を伴った落ち着いた主題である。ともに、一聴してそれまでのタンゴらしからぬ華やかさと穏やかさが感じられ、なんとなくヨーロッパの風情が感じられるともいわれ、美しい旋律に浸ることの出来る曲である。この１部と２部とがそのまま、あるいは部分的な変奏を伴って繰り返され、次第に情感あふれる後半部へと展開される。この二つの主題がユニークであるために余計な編曲は不要で、素直に楽譜をたどるだけで名演が生まれるように思える。

以下、本曲の演奏楽団と私の感想を述べさせて頂く。

① Julio De Caro楽団

Julio De Caroはこの曲が彼の感性をいたく刺激し、共感を覚えたと思われ、計３回の録音を残している。初出は1928年３月28日のVICTOR 80821A、次は1941年９月２日のODEON 54459、最後は1953年4月10日のPATHE PG11066Bだ。

初出は、A⇒B⇒A⇒B⇒Aと演奏され、Aがバイオリン主体の器楽コーラス、そしてBがバイオリンからバンドネオンへと助奏の引継がれる演奏で、この構成はその後の２回の録音の母体をなしている。曲の持つ情感を最大限に引き出す演奏であり、自作タンゴの演奏と共に、彼の面目躍如のレパートリーではなかったかと思われる。その後に録音された他の楽団と比べても、本楽団のこの演奏が最高に思えるのは贔屓過ぎるだろうか。

２回目は初出と同じ構成であるが、ピアノのリードが目立つ。３回目は前２回と比べ、やや遅いテンポであるために、よりしっとりと演奏される。30年近く活動してきたこの楽団の晩年を飾る名演であり、感慨深い。本曲の持つ風情を生かせるのは大規模楽団が相応しいと感じている中で、それに応えてくれる演奏であることからも、本楽団の演奏するこの３つの録音はまことに得がたい録音ではないかと思われる。

② Pedro Maffia楽団

次に登場するPedro Maffia楽団のMAIPOも得難い演奏（ODEON 7180B 1936年７月24日）である。快い和音のハーモニーで主題が展開され、管楽器もさりげなく加わり、特定の楽器によるソロはほぼ排除され、見事な演奏という他ない。ピアノとバンドネオンが時折変奏風に縫うがごとく演奏されるのも、聴いていて心地よい。

③ Juan D'Arienzo楽団

次はJuan D'Arienzo楽団の登場（RCA VICTOR 38702A 1939年４月18日）だ。電撃のリズムが一世を風靡して５年経った頃のこの録音は、自信溢れる小気味の良い演奏である。本演奏に当初親しんだ時期、このようなリズム感に満ちた演奏が当たり前のように聴いていたが、後にDe CaroやMaffiaの楽団演奏を聴いた後は、D'Arienzoのこの演奏に懐疑的なイメージを抱いたのも、あまりに強いリズムがなせた所為か。踊りと傾聴を合わせ楽しむには好演なのだろう。

④ Florindo Sassone楽団

そしてD'Arienzoの後、同じく大楽団編成でのMAIPOは本楽団の演奏（RCA VICTOR63-0106 1951年６月13日）である。この演奏もリズム感が強い早めの演奏であるが、Di Sarli楽団の流れを汲んだ楽団の所以なのか、ピアノの音の運びがDi Sarliのそれを思わせる箇所がある。

そのDi Sarliはこの曲では録音を残していないが、彼ならばどう演奏したのだろうか、あのピアノで、どうこの名曲を処理しようとしたのかに興味が移る。

⑤ Fulvio Salamanca楽団

次の登場はFulvio Salamanca楽団（MUSIC HALL 12388 1964年）。彼がD'Arienzo楽団に入団したのは、1940年以降なので、本曲の録音や編曲は彼にとっては初めてかもしれないが、あるいは本曲がD'Arienzo楽団のレパートリーのひとつだったので、演奏そのものは数多くこなしていたに違いない。そのためか、リズムの運びには共通点が多い。好演には違いないが、やや装飾が多く、ほかの楽団にはないバンドネオン・バリアシオンも蛇足では…というのは言い過ぎか。

⑥ La Orquesta del Tango de Buenos Aires

大規模楽団によるMAIPOの最新盤は本楽団の演奏（MILAN CD CH 702 1990年）で、管楽器やハープも参加している。これは、私の聴いてみたいと考えていた大規模でかつ多様な楽器による編成の嚆矢となる演奏で、ハープによる導入に始まり、続いて木管やバンドネオンを含む器楽コーラスで第１主題を演奏、続いて第２主題に入り、繰り返し、１部と２部が楽器を変えながら演奏される。

この演奏を聴くと、バンドネオンはもう主役ではなく、楽器の一員として適宜その良さを発揮した演奏だ。このような演奏が、もしやDe CaroやMaffiaが50～60年前に目指した目標かも…とも思われ、改めて考え込む演奏である。

● ● ●

標準編成楽団の演奏を終え、つぎに小編成楽団の録音を取り上げよう。

1990年以降は常設の大規模楽団の存在が経営的に無理となり、トリオや四重・五重奏団が主流となる。そんな中、意外にMAIPOが演目に取り上げられている。

小編成楽団では、演奏者の個人技が主体となり、フレージングやバリアシオン、また、楽譜にない編曲や挿入節が加わる。そのところは各ミュージシャンの個性に委ねられ、原曲をさらに魅力ある内容にするのか、または損ねるのか、難しい判断が必要なのだろう。原曲にオリジナリティが強ければ一層ミュージシャンの技量が求められそうである。

⑦ César Zagnoliトリオ

最初は1960年録音のCésar Zagnoliトリオの１曲である（ANTAR PLP-5008）。各主題が短いだけにトリオでの楽譜を追うだけの演奏では単調に過ぎるためだろうか、原曲を崩した演奏がこの曲の持つムードを多少乱しているようにも思える。発表当初は多少の意外性もあり、話題を呼ぶ演奏だったようだ。

⑧ Troilo-Grela四重奏団

次の登場はTroilo-Grela四重奏団によるMAIPO（RCA VICTOR AVL3464 1962年９月13日）で、名演とされている１曲だ。私はDe Caro録音と共に、どれほど聴いたかわからない。導入部からのTroiloスタイルによる、余人の真似のできない独特なフレージング、それにGrelaのギターとの絶妙なやりとり、背後を支える正確なギター伴奏、いずれも名人芸以外の何者でもない。Arolasがどのような演奏をして欲しかったのかは知る由もないが、その如何を問わず、この演奏によるMAIPOはTroilo-Grela両者独自の境地を行く名曲名演なのだろう。

⑨ Octango

演奏している楽団はバンドネオンのPablo Mainetti,バイオリンのPablo Agri他で構成された八重奏団（OCTANGO CD003 2001年11月28日）。演奏されるMAIPOは早めのテンポによる演奏で、なにかEnrique Moraのコンフントを感じさせる。ギターやフルート、サックスも加え、どのような演奏が楽しめるのかと密かに期待する曲だったが、残念ながら、私の希望する内容ではなく、

惜しい気持ちの残る演奏だった。早いテンポであるため、情緒に欠け、せっかくの名曲が持つ風格が薄れてしまったのではないだろうか。本アルバムに収められた別の曲は、それぞれのタンゴの持つテンポによる演奏なので、おそらく編曲者のアイデアによるスタイルと思われる。出来れば、曲本来の持つ優雅さに焦点を当て、また八重奏団の良さを活かして、もう少し落ち着きのある演奏であって欲しかった。

なお本楽団はアルゼンチン・バレー・ダンサーJulio Bocca他の演ずるバレー団とともに活動しているようで、踊り手が選んだダンスの振り付けに合わせた演奏とも思われ、あまり欲は言えないのかもしれない。

⑩ Raúl Garello六重奏団

かつてAníbal Troilo楽団の1960年代にバンドネオン陣に所属して編曲でも支えてきたGarelloのMAIPOである（SOCSA D.S.830 2003年11月3-5日）。Troilo楽団はこの曲を大編成で独立して録音することはなく、Arolas作品メドレーでしか聴くことはできないが、いろいろなスポットの場では演奏していたものと思え、それがTroilo楽団の後半期であれば、Garello編曲の下、ここに聴くような演奏だったかも知れない。

本六重奏団では、フルート、パーカッションを加え、音に彩色を施してゆったりとした演奏が楽しめる。Garelloのバンドネオンも冴え、控えめなテクニックで要所を飾る。このあたり、おそらくはTroiloの意向を汲んだ演奏ではないかと察せられる。惜しむらくは楽器に多様さを求めたためだろうか、音の厚みが薄まっていることかと思われ、もし、大編成であれば本タンゴで１，２を競う名演となっていたのではと感じられる。

⑪ ギターグループによるMAIPO－Juanjo Domínguezギートリオ

最初は本トリオによるMAIPOだ（EPSA 17076 1996年9-10月）。この演奏も前述のTroilo-Grelaと同様、ほぼギター独奏により独自の境地を切り開いた好演である。原譜を超越し、どう聴き手に飽きさせずにギターと曲のそれぞれの妙味で聴いてもらうかにひたすら専念した演奏、聴く側はその魅力に圧倒される。ほんの遊び半分で多少ギターを触るだけの私の耳には驚きの演奏であった。

⑫ César Stroscio とEsquinaのトリオ

本演奏は2001年の録音で、数年前購入した数枚のCDに含まれていた１曲だった（ACQUA AQ225 2001年）。

バンドネオン・ギター・コントラバスのトリオによるアルバムであるため、本曲もこのコンフントでの演奏と思いきや、ギターデュオ（？）によるMAIPOなので、意外感を覚えた記憶がある。

Juanjo Domínguezとは全く逆に、テンポは緩やかで技巧に走るのではなく、しっとりとした情感溢れる演奏に心を揺さぶられる。大規模楽団でしか本曲の素晴らしさは表現できないと思い込んでいた私にとって、本演奏は、ギター１本でこれほどの表現も可能なのかと感じた好演である。

⑬ 34 Puñaladasギター四重奏団

2004年録音の本演奏もギターのみの四重奏団によるものである（歌手が加わり、通常は５人編成で活動している模様）（ACQUA AQ074 2004年８月）。

⑭ Leopoldo Federicoのソロ演奏

本演奏はMAIPO唯一のバンドネオンソロである。気取らず、さらりと受け流すような曲の流れ、しかしどの小節にもこの曲に寄せるFedericoの慈しみが感じられる演奏だ。同様な愛情を抱いて演奏したTroilo-Grelaや、さらには同じバンドネオン奏者だった作曲者Arolasの心情を思いつつ、心を込めて演奏するFedericoの姿が目に浮かぶようである。右手と左手が、相互に寄り添い、あるときは対旋律を、あるときは主旋律を受け持って、左右一体となった美しいMAIPOを聴くことができる。

こうしてMAIPOばかりを並べて聴くと、やはり行き着くところ、名曲に凡演なしと言われるとおりで、どの演奏も素晴らしいと言える。欲を言えば、大規模楽団でハーモニー主体のゆったりとしたテンポによる流麗な演奏が聴ければとの思いは強いが、大編成が望めない今日のタンゴ楽団の時勢ではそれも難しそうだ。

● ● ●

⑮ 未聴のMAIPO 3曲

MAIPOにとりつかれて20年余、残念ながら、音源収集の努力が報われず未聴の録音が３曲ある。それは次の録音だ。

（１）Roberto Firpo楽団の1918年？録音（ODEON:555A）

このレコードは本曲の処女録音といわれているが、存在すら不明である。機械式録音で、かつ復刻盤の少ないRoberto Firpo楽団の盤なので、おそらくもうどこにも存在していないのではないかと思われる。仮に見つかったとして、その音質は劣化がかなり進んでいると推測され、また市販される好機があるとしても、期待程には、感激もないのではとも思われる。それは同年代の他の稀覯盤も同じことが言えるからだ。

とはいえ、やはり聴きたいと思う願望は捨てられない。

（２）Osvaldo Fresedo楽団の1980年録音（CBS:Columbia20189）

何時かは容易に入手できると思い、今日に至っている。おそらく彼好みの大編成によるFresedoスタイルが楽しめるのではないか、またこれこそが、私の希望のMAIPOかも…との期待を込めた未聴の一曲である。

（３）Color Tango楽団の1996年録音（FOREVER:FMCD9709）

このCDも、そのうちに入手可能と思いながら、そのチャンスがなかった１曲である。

ところで曲名MAIPOとは…？

さて、今まで取り上げてきたMAIPOという曲名の意味は一体なんなのだろう。

本文を纏めるにあたり、おそらく想像してきた、ブエノスアイレス市のMAIPO劇場を記念して、顧客か知名人に乞われてArolasが作曲したものと思い込んでいたが、本当にそうなのだろうか。

その理由は、Arolasを述べた文献を見ても、劇場との関わりにはどれにも触れられてはいないからだ。El libro del tangoにも「MAIPO」の項目には劇場名とタンゴとの関わりが深い旨の解説がされてはいるものの、Arolasには触れていない。それに、MAIPO劇場の名が確定したのは1922年頃の由、本曲は1918年作とあるので、柿落とし記念でもなさそうだ。

“EL LIBRO DEL TANGO” TOMO Ⅱより引用

また「タンゴ名曲事典」にも題名のいわれには触れていない。

全く歌われることのないGabriel Clausi（著名なバンドネオン奏者で、Arolasとも交流があった由）の作詞にヒントを与えてくれるかどうかを調べてみると「古ぼけたMAIPOは、あの頃の愛の数々をその光の下で見せてくれる…」とあり、「わが町の劇場を君に語りたい…」とも歌われているので、題名は劇場のMAIPOを指しているのかとも思われる。

或いはどこかの地名かとも思い、小学館「世界大地図」を見ると、チリ国にMaipo山があり、麓では19世紀からブドウ（従ってワインの産地）が栽培されているとか。また、この付近では1818年にスペイン本国と植民者間で独立戦争があった由（植民者側の勝利に終わった）。

しかし、こうして並べても、Arolasが何を考えて題名としたのかは知るべくもなく、後世の私たちは、彼が今から100年近く前に残してくれたこの名曲の調べに、ただ耳を委ねるしかないのだ。

おわり

（編集部注）

NTA会員で海江田さんお手持ちのMaipoの音源を聴きたいと希望される方はメール又は往復はがきで（住所・メールアドレスは会員名簿に記載されている）コピーを入手する方法を海江田さんにお問い合わせ下さい。

第５回

日本タンゴ・アカデミー主催

ミロンガパーティー

日時：2015年８月２日（日）　14：00より

会場：いきいきプラザ一番町　カスケードホール

タンゴこぼれ話……その3

親しみ易い言語“ルンファルド”

Lenguaje de compadrito “Lunfardo”

1998年GENTE誌
筆者：Héctor Ángel Benedetti
訳：弓田　綾子

ルンファルド（隠語）は、19世紀から20世紀に入っての第一次大戦にかけて、イタリアやスペインの人たちがブエノスアイレスに移住をしたときに入ってきた言葉とされている。

当時、彼らはブエノスアイレスでは決して使われることはなかった“Shusheta（めかしこんだ）”、“Bacán（金持ちの遊び人）”、“Deschavar（告白する）”などのスラングをその生活の中で、周囲を気にせず日常語として使っていた。

本来、ルンファルドは犯罪者の使った言葉といわれているように、犯罪者が警察に見つからないために、独自に造ったコード・暗号だった。

やがて、一般には毛嫌いされていたルンファルドが、次第にブエノスアイレスの下町で使われていた独自の俗語や、移民の人たちが持ち込んだスペインの隠語“Germanía”、フランスの隠語“Argot”などが、混じりあったりしながら、結果的に新たなルンファルドがブエノスアイレスで造られた。その中には遊び言葉として面白おかしく“タンゴ”を“ゴタン”などと、わざと語順を逆さまに話し楽しんでいた。だが、それらの言葉は、同じスペイン語を話すスペイン語圏の人たちですら理解出来ない場合が少なくなかった。

しかし、時の流れとともにルンファルドは、ブエノスアイレスの下町で仲間同士が、一種の連帯意識を育むために親しみを込めて気軽に使うようになった。

その結果、ルンファルドはほんとうのスペイン語ではないけれど、この親しみのある言葉ルンファルドを、仲間との連帯感を保つ意味と、ブエノスへの愛情表現を高める上で、次第にこれがふさわしい語彙だと、皆が認めるようになったのである。

そして、このルンファルドをタンゴの独自性を出すために、作詞家や作曲者たちは自らの音楽に好んで取り上げるようになった。ここに有名なスラングの曲がある。

それは、フアン・ロレンソの「Uno y uno（イチかバチか）」、また1926年にフランシスコ・マリーノが作詞した「Traverso（さすらい人）」や「El Ciruja（浮浪者）」である。

これらの曲によってルンファルドは、犯罪者の単なる隠語から脱却して、タンゴ独自の親しみ易い語彙として、その生命を輝かせるようになったといえる。

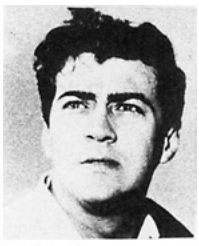
（2010/12/ 5タンゴ心酔クラブ会報より転載）

私の想い出の
アーティストたち

弓田 綾子

オスバルド・プグリエーセ

ホルヘ・マシエル



アベル・コルドバ

カンバラーチェ逍遥（2）

カラ振りに耐えて つかむ“歓喜の涙”

島﨑 長次郎

スタートが順調だったせいで、“古道具屋行脚は実に楽しい”と前回で述べたが、ことはそう簡単にいかない。第一に問題なのは、この世界でみなライバルで、先生はいない。したがって、どこにどういう店があって、どんなものがあるなどという情報は教えないのが普通だし、聞かないのが一種のマナーになっている。だから、仲間との会話の中で得たかすかな情報をもとに推理を働かせて当たりをつけるとか、地図や電話帳などを片手に、ともかく自分の足で店を探し、コツコツと根気よく歩くしかないのだ。当時のSP発掘の当たりは５～６回に１度といった具合で、カラ振りは当たり前がこの世界の常識だ。

歩き始めたのは、SPから次第にLPに移行する時期だった昭和32（1957）年頃だったので、SP探索の市場としては決して悪くなかったといえよう。歩くのはもっぱら住まい周辺が多く、京王線の初台、幡ヶ谷周辺、鍋屋横丁から東中野のあたりまでが多かった。当時は、土曜日はまだ休日ではなく、いわゆる“半ドン”だったため、歩くのはもっぱら日曜日で、レコード・ケースをぶら下げ、手ぬぐいを腰にあちこちと飽きずによくさまよい歩いたものだ。この種の店主にはなぜか一刻者というか、無愛想な人が多く、それに冷たくあしらわれたうえにカラ振りが続くのは確かに辛い、情けなくなるときもある。でもときに出会う当たりの喜びはかけがえのないもので、この一瞬ですべてが帳消しになるから不思議だ。釣り人の心境もこんなものか。思わず心で叫ぶ快哉にこの道の醍醐味があるのだ、といいたい。

ジャズ・コレクターとの交流で得た貴重盤

その頃、タンゴ・ファンで古道具屋歩きをしていたのは、田端の“タンゴ床屋”として知られていた大先輩の寺田太作さんのほか、そう沢山はいなかったように思う。これに対し、ジャズの

Orq Tip. Los Provincianos　　Bianco＝Bachicha　　Orq. Tip. Brunwick

方では前回も述べたが、西島経雄（別名：紅井良男＝ベニー・グッドマン）さんのほか数名の方が精力的に歩いていて、ときにさりげなく情報をくれたりした。中村とうようさんもこれらの人々と交流していて、相当の成果をあげていたと、晩年に上梓した「Toyo's chronicle」で述べている。幸いなことに私もこれらの人たちとの交流があったため、ときには思いがけずに大きな収穫を手にし、感涙に咽んだことも何度かあった。

その相手の一人が西島さんだった。当時、彼は立川の米軍基地に24時間勤務で勤めていた関係で、明けた翌日は終日中央線沿線の古道具屋歩きが日課になっていたため、その収穫は群を抜いていて、ともかくメインのジャズにはじまってポピュラー全般に手をひろげ、見張るばかりの枚数が部屋一杯の状況だった。その中にはタンゴもあり、国内盤のほか、垂涎のキャムデン盤やフランス盤も散見され、“もしジャズの珍しいものを持って来てくれたらこれらは出してもよい”といわれ、闘志を燃やし、ジャズレコードも懸命に勉強し、オリジナル・ディキシーランド・ジャズ・バンドとか、テッド・ルイス、ジミー・ランスフォード、デューク・エリントン、ベッシー・スミスのものなどを、あちこちで探し回った。あるとき東横線の学芸大学駅近くの古道具屋で、演奏者は不明だったが、見るからに時代がかった米国盤の「オーケー」や「コロンビア」の大レーベルのジャズ３枚ほどを見つけ、これを持参したところ、“どこでだか知らないけれど、よくぞ見つけてくれましたね、”といい、かねて欲しいと念願していたオルケスタ・ティピカ・ロス・プロビンシアーノスの「エル・ディスティンギード・シウダダーノ」（CAMDEN-37248）と、フランス盤でビアンコ＝バチーチャの「アングスティア／フェア」（74356）の美麗盤をもらうことができて欣喜雀躍。これらは今も大切に保存している。

その西島さんの友人に、同じジャズ・コレクターの久野木修治という人がいたが、ある日フラッと我が家にやってきて、新聞紙に包んだSP ２枚を取り出し、いきなり“金が必要なのでこれを買って欲しい”というのだ。当時は幻のレーベルとされていた黄金色に輝くブラジル・ブルンスウィック盤の、それも「ラ・クンパルシータ」（6009A）だったのには驚いてしまった。これは有名なアルゼンチンのＪ.ポリート指揮のオルケスタ・ティピカ・ブルンスウィックとは異なるもので、時代的に電気録音直後といった雰囲気をもった味のある演奏で大いに気に入った。そしてもう１枚はコロンビア盤で「オルケスタ・ボナベナ」というまったく初めて見る名前の楽団で、？？という感じだったが、とにかくこの２枚をもらった。代金は1500円で、昭和33年頃にしてはかなり高い買い物だったが、折角持って来てくれたのと、黄金色の「ラ・クンパルシータ」に強く惹かれたのでこれを買った。

ところが、当時まったく素性が分からず、誰も知らなかった「ボナベナ」の方は、半信半疑で聴いて、なかなかイカスと思っていたところ、これを割ってしまい無念の涙にくれ、真っ二つになったそれを捨てきれずにいたが、それもその後不明になって、曲名は記憶にない。でも耳に残る音で、それは間違いなくその後CTA-5047（1985年）でリリースされたLP「アイエタ／ボナベナ楽団」の中にある「ポブレ・ミーナ」（5507）に間違いないと確信した。割ってしまった苦い思いと、音による再会の喜びの複雑な心境ではあった。

下北沢で出会った、オスカル・ローマの「ラ・クンパルシータ」

当時、中村とうようさんは黒人音楽に凝っていて精力的に都内のあちこちを歩いていたので、

Carlos Sevilla

あるとき“希望に叶うかどうか、少し家にジャズもあるので、一度遊びに来ないか”と誘って、一晩ゆっくりと我が家で古道具屋談義をしながら酒を酌み交わした。確か彼が「ラテン音楽入門」＝音楽の友社（1963年）を上梓して間もなくの頃だった。お土産に当時はなかなか入手しにくいイグナシオ・コルシーニのLPを持参してくれたのを覚えている。彼からは、その後、SPでこそないが、当時にあっては貴重なLPを何枚か貰っている。その中でとくに印象に残るのが２枚ある。その一つがアグスティン・マガルディのビクトル最初のLPで、渇望していた「ディオス・テ・サルベ・ミーホ」の入ったもの。ただしこれはホワイト・レーベルの海賊盤だったが、音質も悪くないので２枚を譲ってもらった。もう１枚はアメリカのSMC（スペイン・ミュージック・センター）のLPで、かねて高山先生のお宅で聴かせてもらい、是非欲しいと思っていたパジャドールのカルロス・セビージャのもの。これは確か“とうよう”さんが初めての海外旅行でキューバなどへ行ったときだから1965年頃だったと思うが、お願いしたのを忘れずニューヨークで探して持ち帰ってくれた。このセビージャは日本にもその後来てヤマハホールなどでその歌声を披露したが、マガルディのヒット作「ディオス・テ・サルベ・ミーホ」や「ラ・クンパルシータ」「牛車に揺られて」など、珠玉の作品をパジャドール特有の鄙びた味わいで聴かせ、実に胸を打つのだ。これは晩酌の折などに、今でもしばしばターン・テーブルにのせて聴き、今は亡き“とうよう”さんを偲んでいる。

その“とうよう”さんの情報で、ある時に覗いたのが下北沢の古道具屋だった。小さな店でその日は僅かなレコードしかなく、収穫はまったくなかったが、なにやら品があって京都訛りの感じのよい店主が応対してくれたので、名刺を渡し、いつものようにタンゴとは言わず、“小さいレコード（30cmの大きい盤はクラシックなので）で横文字のものが出たら連絡ください”と頼んで帰ってきた。それから一月くらい経った頃だった。その店主からはがきが来た。当時はまだ我家には電話がなかったので…。文面は、“ご依頼に叶うかどうか、小さい盤で横文字のものが少しまとまって入ってきたのでご覧になってください”とのこと。職場を休み、早速に自転車（運搬にしごく便利なので…）で下北沢に走った。

店に着くと奥から店主が60 ～ 70枚ほどのSPを持って現れた。逸る心をおさえ、一枚一枚丹念にめくっていくと、すべてが国内盤だが、盤質もよく、その半数はアルゼンチンもので、ほかにヨーロッパ録音のフランシスコ・アロンジ（Victor.JA-175「DUELO CRIOLLO」）やミゲル・ロサリオ（Columbia.J-1912「QUE HA PASADO ？」）などの貴重なものも散見され、次第に興奮度が高まってきた。そしてそれが極限に達したのがオスカル・ローマ楽団の「ラ・クンパルシー

Oscar Roma

Francisco Alongi

Miguel Rosario

タ」(Crystal.CP932) を引き当てたときだった。クリスタルは、関西を基点にしていたタイヘイ・レコードの外国部門を受け持つレーベルで、関東ではなかなか入手困難だっただけに、これはまさに幸運で、なんとも嬉しかった。

ほかにもオスカル・ローマ (Crystal.P-149「OTOÑAL」)、ターノ・ヘナロ (Victor.JA-45「CLAVEL DEL AIRE」)、エドゥアルド・ストゥップス (Parlophon.E-5037「MOCOSITA」)、アダルベルト・ルッテル (Telefunken.10633「PATO」)、フアン・ジョサス (Polydor.10311「PADRE NUESTRO」)、カルロス・モリーナ (Victor.JA-281「ALMA EN PENA」)、エル・ドラッド・タンゴ・バンド (Lucky.S-8「MIENTRAS LLORA EL TANGO」)、ハインツ・フッパーツ (Columbia.JX-46「別れの手紙」) など、全盛期のドイツの珍盤もとりまぜて40枚ほどを求めて帰ってきた。値段は確か1枚30円と安かったこともあって、知らせてくれた礼の意味で少しイロをつけて代金を払った記憶がある。

Eduardo Stubbs

Adalberto Lutter

Eldorado Tango Bando

豊富に音源がそろい、今は聴こうとすればいつの時代のものも、どんな演奏者のものでもいとも手軽に聴ける時代になった。だから古道具屋や中古店などで汗水垂らして集めたことは無駄だったか、というと、決してそうは思わない。確かにLPやCDは手軽でよい。だが、SPそのものから届けられる音には、胸を揺さぶって止まない熱気と優しさがあるからだ。継ぎはぎのきかない、“一発勝負”のひたむきさと気迫とでもいうべきか。スクラッチ・ノイズを超えてくるその演奏には、時代を超え、惜しみなく聴く者を往年の佳かったタンゴの世界へ誘ってくれる。これがたまらなくいとしいのだ。

(つづく)

Amigo Horacio Ferrer : ¡Renacerás!

オラーシオ・フェレール――また生まれておいで!

高場 将美

2014年12月21日、ブエノスアイレスで、オラーシオ・フェレールがこの世を去った。わたしがこれを知ったのは、時差もあって、日本の23日だったろうと思う。わたしは、毎週、彼のＦＭ放送を聴いていたので、彼が今回の人生を生き尽くしたことは、２～３ヶ月前から感じていた。でも肉体的にはまだまだ存在してくれると楽観していたので、ショックは大きかった。ここでは私的な思い出ははぶいて、彼の生きかたをたどっておこう。

オラーシオ・フェレールは、1933年６月２日に、ウルグアイの首都モンテビデオで生まれた。父はウルグアイ人の歴史教授で、スペインのカタルーニャ地方に移住したイギリス人一族の血を引いている。母は、バスクやイタリアの血をもっているようだが、アルゼンチン人の、たいへん詩を愛する女性だった。裕福とはいえないが、本がたくさんある家庭だった。オラーシオは、ポルテーニョ（ブエノスアイレスっ子）とモンテビデオ人を合成して、自分は「ポルテビデアーノ」だと（彼らしいダジャレ、ことば遊びで）称していた。1984年からアルゼンチン国籍を取っている。

モンテビデオの共和国大学の建築科に８年間いたが、卒業はしていない。でもこの大学の秘書課で働き、また《エル・ディア》紙に寄稿して（文化に関する記事・評論・インタビューなど）、まずまず安定した収入を得ていた。20歳と少しで、ラジオのタンゴ番組を作りはじめた。同時期に（1954年）、タンゴ研究団体《クルーブ・デ・ラ・グワルディア・ヌエバ Club de la Guardia Nueva》の創立者・中心人物のひとりとなった。機関誌《タンゲアンド》の編集・執筆・イラスト……と大活躍。

この時期に――すばらしい宿命！――アストル・ピアソーラのタンゴ革命がはじまった。オラーシオは、子どものころからタンゴを聴き、レコード・コレクターでもあった（貴重な古レコードも、そんなに高価なものではなかった）。なんといってもトロイロ楽団のファンだったが、その楽団によるピアソーラ作曲・編曲の録音に感動し、最初のピアソーラ崇拝者たちのひとりになった。彼の、いわゆるパリ留学の間は文通していた。パリから帰ってきたピアソーラは、ブエノスアイレスではなくモンテビデオで下船し――飛行機には金持ちしか乗れない。大西洋航路の時代――、オラーシオほかグワルディア・ヌエバ会のメンバーの熱い歓迎を受けた。

オラーシオは、ピアソーラ熱が高じて、バンドネオンを学び、ピアソーラの真似をした作曲・編曲でグループを組んで、ライヴ（発表会かな？）までやった。これについては後年、なにも語っていないので、かなりヒドかった？

1959年に、ブエノスアイレスで『タンゴ――その歴史と発展 El Tango: su Historia y Evolución』を刊行。この小さな本は、わたしは今日でもタンゴ概論の最高峰、根本的な著作だと思う。告白

すると、その後わたしの書いた文章は、すべて彼の文体・スタイルに全面的に影響されている、スペイン語と日本語はちがうのだけれど。

2014年６月、81歳の誕生日記念番組にて。
www.facebook.com

64年に、初の詩集『ロマンセーロ・カンジェンゲ Romancero Canyengue』を出版。彼にしかないスタイル・語法で注目された。Tangamente（タンゴっぽく）とか、今ではふつうに使われてもいる造語は、この詩集で発明されたものだ。後年ピアソーラが作曲した『最後のグレーラ La última grela』は、この詩集の1篇に加筆・改定したもの。

67年に大学での安定した仕事を捨てて、単身ブエノスアイレスにやってきて、貧困生活をスタートした！　68年に、ピアソーラ（作曲・編曲・指揮・バンドネオンおよび出資）と、『ブエノスアイレスのマリーア』を上演した（脚本・作詞・語り手を担当）。歌手エドムンド・リベーロが助けの手を差し伸べ、彼の店《エル・ビエホ・アルマセーン》の専属司会者にしてくれた。少し収入の道が開けたが、びんぼうは変わりない。でも、黒っぽい（元の色は何だか分からない）長いマントで、胸に花を挿した怪しいダンディ姿で、有名人（？）になった。70年に百科事典『タンゴの書 Libro del Tango』を執筆･出版。76年にアルベアール･ホテルに住むようになったから、そのころから、少しは収入もよくなったのかな？　82年に、ずっと昔から彼の追っかけファンだった女性画家ルルー･ミケーリ Lulú Michelli と結婚した。オラーシオはルルーの男、ルルーはオラーシオの女――この男と女は、いつもいっしょに生きていた。今もそうだといえるだろう。

1990年、アルゼンチン国立タンゴ・アカデミー創立。オラーシオは会長になった。

この記事の最後は、彼が書いた歌詞『3001年へのプレリュード Preludio para 3001』（ピアソーラ作曲）に語ってもらおう。

Renaceré en Buenos Aires, en otra tarde junio, / con estas ganas tremendas de querer y de vivir; / renaceré —fatalmente—, será el año tres mil uno, / y habrá un domingo de otoño por la plaza San Martín. / ... / ¡Renaceré! ¡Renaceré! ¡Renaceré! / Y una gran voz extraterrestre me dará / la fuerza antigua y dolorosa de la Fe, / para volver, para creer, para luchar. / ...

（わたしはまた生まれよう、ブエノスアイレスで、べつの６月に――人を好きになることへの、生きることへの、このとんでもなく大きな欲望をもって。わたしはまた生まれよう――宿命的に――、それは3001年だろう。サンマルティーン広場（アルベアール・ホテルの前）に秋の日曜日があるだろう。わたしはまた生まれよう、生まれよう、生まれよう！　地球外の大きな声がわたしにくれるだろう、信じることの古く痛ましい力を、帰ってくるために、信じるために、闘うために……）

Esa música eterna

永遠の音楽

1998年GENTE誌
筆者:Horacio Ferrer
訳:弓田　綾子

私がタンゴを身近に感じ、その魅力を探るとき、いつも思う……。タンゴの良いところは、いつでもその時代にマッチすることができる。

首都ブエノス・アイレスの港町ラ・ボカで誕生したタンゴは、激しいリズムのカンドンベ、ミロンガ、ハバネラなどが入り混じり、スペインやイタリアからの移民たちの溜り場であった酒場で、日々の不満を酒に女にと、荒れ狂った男たちがそのリズムを荒々しく踊っていた。

ラジオやテレビ、映画が生まれたときもブエノスの街々には、常にタンゴが流れていたのです。例えば、一つの文化を紹介するためには、18巻の書物が必要と例えるとします。しかし、それら書物だけでほんとうにその文化は、全員に伝えることが出来るでしょうか。いや、それには具体的な行動こそが必要なのです。音楽、詩、踊りなど……。

あのメランコリックなリズムに、男女が身体をピッタリ寄せ、手を握り、情熱的なリズムを身体に刻み、思いを寄せて熱く踊っている姿を見ると、誰もがそれは紛れもなくタンゴであるとすぐにわかるでしょう。

また、哀愁と情熱を秘めたバンドネオンの音色と激しいリズムに、それはすぐさまタンゴとわかる。そして、タンゴ界最高の歌い手でありタンゴの黄金期を築き上げたカルロス・ガルデルや歌う二枚目スターといわれたウーゴ・デル・カリル、これらの人たちのタンゴに込められた情感の悲しみや、苦しみを歌う表情。それらの曲を耳にすると、即、多くの人々は即座にタンゴというでしょう。タンゴには深い哀愁と人生そのものが秘められている。だからタンゴの文化を説明、紹介するのには、18巻の書物などは全く必要ないのです。

タンゴの文化は、感性と心で奏でる楽器があればタンゴの真髄を十分に伝えることができます。難しい書物や理論は要らない。タンゴは目で見て、耳に聴く音楽そのものに説得力があり、アイデンティティの強い文化なのです。

タンゴを愛する人たちにとって、タンゴは永遠の音楽であり、大きな誇りのあるひとつの貴重な文化だといえるのです。

オラシオ・フェレール
1933年ウルグアイで生まれる。詩人・作詞家。
アストル・ピアソラの曲に多くの作詞をしたことで有名である。
アルゼンチン国立タンゴ学会会長。著書も多数。
タンゲリーアやコンサートの司会なども務める。
代表作：「Balada para un loco（気違い男へのバラード）」、「Chiquilín de Bachín（バチンの少年）」など。

レオポルド・フェデリコ追悼

吉村俊司（東京都杉並区）

いささか個人的な想い出になってしまうのだが、私がレオポルド・フェデリコという名前を初めて聞いたのは1975年のことだった。当時私は札幌在住の小学５年生で、親の影響からタンゴという音楽を一つのジャンルとして意識し始めたばかりの頃。おそらくはフルビオ・サラマンカの来日にあわせてのことだったのか、NHK-FMでタンゴが続けて放送され、その中にフェデリコの当時の新作『今日のブエノスアイレス』からの抜粋も含まれていたのだ。一聴してすぐに、家にあったカナロ、フィルポ等のレコードとは違う新しい響きに魅力を感じ、録音したカセットを何度も聴く。やがて、レオポルド・フェデリコの名前は私にとって特別な存在となって行った。

レオポルド・フェデリコを録音したカセットの手作りラベル（A面には同年来日したフルビオ・サラマンカ楽団）

翌1976年にはフェデリコが初来日を果たす。公演の情報がわからず生演奏に触れることはできなかったのだが、NHK-FMで放送されたスタジオライブを録音し、これまた何度も聴き込んだ。「夜のプレリュード」「エル・チョクロ」「軍靴の響き」…オルケスタの演奏の躍動感に心を踊らせ、フェデリコ＝ブリートス＝カバルコスのトリオによる「アディオス・ノニーノ」の尋常ならざる迫力と表現力に圧倒された。かくして、私がタンゴを聴く上での土台のかなりの部分がフェデリコによって形成されたのは間違いない。

フェデリコの生演奏に初めて触れたのは1985年、彼の２度目の来日公演であった。既に東京の大学に進学していた私は喜び勇んで渋谷PARCOの西武劇場に足を運び、以後は1991年の公演こそ観逃してしまったものの、1988年、1999年、2003年の公演を観ている。特に2003年は公演前から「日本での最終公演」と伝えられ、日本のバンドネオン奏者（京谷弘司、小松亮太、北村聡、早川純）とも共演。

来日公演のプログラム

演奏内容はこの上なく素晴らしく、今でも強く印象に残っている。

偉大なバンドネオン奏者、レオポルド・フェデリコ。1927年に生まれ、1944年のディ・アダモ・フローレス楽団でのプロデビュー以来、カルロス・ディ・サルリ楽団からアストル・ピアソラのブエノスアイレス八重奏団まで様々なスタイルの楽団に参加。1958年に自身の楽団を結成してからはオルケスタ・ティピカによる表現にこだわって最晩年まで活動。一方では小編成でも素晴らしい名人芸を聴かせ、さらにはバンドネオンの完全ソロの編曲、演奏では他の追随を許さない存在であった。

どんなスタイルにも順応する柔軟性、どんなに楽器が重なっても埋もれない芯のある音色、強い音圧と暖かな表現。バンドネオン奏者としてのこの上ない存在感を見せながら、いたずらに自己主張したりせず、音楽に自らを捧げる姿勢で演奏をしてきた。作編曲においては、タンゴの伝統と現代性を調和させたいわば中道路線で、いくつもの素晴らしい作品を残した。

オルケスタのバンドネオン陣にはエクトル・レッテラ、アントニオ・プリンシペらが古くからずっと在籍。歌手のカルロス・ガリも1960年代からの長い付き合いで、フェルナンドとオラシオのカバルコス父子は２代にわたってコントラバスで土台を支えた。フェデリコの仲間を大切にする人柄が偲ばれる。一方で、ピアノのニコラス・レデスマ、バイオリンのダミアン・ボロティン、バンドネオンのオラシオ・ロモやラウタロ・グレコといった若手にも活躍の機会を与えてきた。1970年代にバンドネオンの修行のためブエノスアイレスに渡った米山義則も機会が与えられた一人だった。

個人的に大好きな演奏は、初めてフェデリコに出会ったアルバム『今日のブエノスアイレス』に収録された「アラバル・タンゲーロ」や「ノルテーニョ」、上述の1976年のトリオによる「アディオス・ノニーノ」、アントニオ・アグリ、オラシオ・カバルコスとのトリオによる「エラモス・タン・ホベネス」、1960年代のオルケスタの録音で「天体」といったところ。途中のバンドネオン・ソロで意表をつく転調を見せる「ラ・クンパルシータ」も忘れられない。

最後の来日以降も、映画「アルゼンチン・タンゴ～伝説のマエストロたち」やYouTubeで観られる映像ではいつも元気そうな姿を見せ、いくつかの録音では全く衰えることのない演奏を聴かせてくれていたマエストロ・フェデリコ。いつかは来るとわかっていても、いつもずっと先だと思っていた別れの日は、昨年12月28日に突然来てしまった。大きな寂しさを感じつつ、これまでの豊かな音楽への感謝の気持とともに、さようなら、マエストロ・レオポルド・フェデリコ。

第3回 蓄音機(HMV163)を使用した タンゴ名盤コンサートの報告

吉岡達郎（四日市市）

勝原良太氏をリーダーとする「なごや蓄音機クラブ」主催の第３回「蓄音機・タンゴ名盤コンサート」が、９月23日名古屋市中区にある「巌本真理メモリアルホール」に於いて開催されました。会場は熱心なSPファンで満員の盛況でしたが、タンゴの愛好家ばかりでなく、ジャズやシャンソンなど多彩なSPファンが来場されるのがこの会の大きな特徴です。これはひとえに主催者である勝原良太氏の人望によるところが大きいと私はかねがね感じているところです。

さて当日は、私を含めて３名のアカデミー会員及び元会員１名による３曲選と、日本タンゴ・アカデミー名誉会長の島崎長次郎氏による「タンゴの黄金時代を飾ったひとびと」と題した14曲の、２部構成で行われました。14時スタートから17時までの３時間、会場のファンはHMV163の名器から出る迫力ある音の名曲名演にしばし聴き惚れた時を過ごしました。私はそう確信した次第です。

第１部　日本タンゴ・アカデミー会員による３曲選

１　勝原良太（主催者　四日市）

AUDACIA（大胆に）　ロシータ・キロガ（唄）　1926年
NUNCA VOLVERÁ（決して帰らない）　フアン・マグリオ“パチョ”楽団　1927年
CON TU MIRAR（あなたの瞳に）　フアン・マグリオ・“パチョ”楽団　1928年

２　陳　昌敬（山口）（元会員）

DERECHO VIEJO（昔かたぎの男）　フリオ・デ・カロ楽団　1926年
NOBLEZA DE ARRABAL（場末の貴婦人）　フリオ・デ・カロ楽団　1927年
COPACABANA（地名）　フリオ・デ・カロ楽団　1927年

３　宮本政樹（東京）

EL DISTINGUIDO CIUDADANO（敬愛なる市民）
ロス・プロビンシアーノス楽団　1932年
MILAGROSA VIRGENCITA（奇跡を起こす聖母様）
ルイス・ペトルチェリ楽団　1929年
VIEJO CIEGO（盲目の老人）　フランシスコ・カナロ楽団（唄）チャルロ　1928年

4　吉岡達郎（四日市）

CORALITO（小さなサンゴの首飾り）	オルケスタ・ティピカ・ビクトル	1926年
DE MI BARRIO（私の町で）	オルケスタ・ティピカ・ビクトル	1927年
JULIENNE（人名）	オルケスタ・ティピカ・ビクトル	1927年

矢張りSPコンサートならではのプログラムと言えるでしょう。将に古典古典（こてん・こてん）のタンゴ・コンサートでした。

第２部　タンゴ黄金時代を飾ったひとびと

島﨑 長次郎

＊哀愁のヨーロッパに咲いたタンゴの華

1	MAMA YO QUIERO UN NOVIO（ママ！私　恋人が欲しいの）	バルナバス・フォン・ゲッツィ楽団
2	DUELO CRIOLLO（クリオージョの決闘）	エドゥアルド・ビアンコ楽団
3	BELLO SUEÑO（麗しき夢）	ホセ・ルケッシ楽団

＊第１期大黄金時代を彩った名流たちの遺産

4	ZORRO GRIS（銀狐）	フランシスコ・カナロ楽団	1927年
5	IRUPÉ（大鬼蓮）	ロベルト・フィルポ楽団	1929年
6	POR MI VIEJITA（我が老いし母の為に）	ロシータ・キロガ（唄）	1928年
7	DIOS TE SALVE MI HIJO（神よ、息子を救い給え）	アグスティン・マガルディ（唄）	1933年
8	EL PENADO 14（囚人第14号）	フリオ・デ・カロ楽団	1931年
9	SIEMPRE TE RECUERDO（忘れがたき君の思い出）（ｖ）	フアン・マグリオ・“パチョ”楽団	1928年
10	TIGRE VIEJO（老いたる虎）	オルケスタ・ティピカ・ビクトル	1926年

＊第２期黄金時代のタンゴ・シーンを飾った４大巨匠

11	SUR（南）	アニバル・トロイロ楽団＝Ｅ・リベロ（唄）	1948年
12	MANDRIA（臆病者）	フアン・ダリエンソ楽団（唄）Ｍ・ブストス	1957年
13	EL REFRÁN（ことわざ）	オスバルド・プグリエーセ楽団	1951年
14	LA CUMPARSITA（小さな仮装行列）	カルロス・ディ・サルリ楽団	1955年

流暢でさわやか、しかも丁寧な説得力のある、島﨑氏の解説には全く頭が下がります。ユーモアと機知に富んだ、その上温かみのあるコメントは、いつもながらタンゴの素晴らしさを聴く者に与えてくれ、感動を共有させてくれる企画は嬉しい限りです。

そんなこんないろいろな事を考えさせられた、名古屋のレコードコンサートではありました。

姫路中南米音楽愛好会

創立60周年記念特別会

２０１４年11月16日（日）　北京閣（姫路市安田）別館３Ｆ

鈴木忠昌（姫路市）

11月16日10時すぎ、北京閣入口付近に会場準備の会員、早目に着いた参会者が集まり始める。姫路の街は天気がよく晩秋の日差しが暖かい。特別例会が動きだす。

私共の愛好会は1955年10月、姫路をメインに、西播地方のタンゴ愛好者を集め会創立の打合せと役員選任。1955年11月19日第１回レコード・コンサート。以後例会、特別例会（主に演奏会）を重ね、今年で60年となる。

例会の会場は喫茶店を利用。前半1978年までは「ハトヤ」（呉服町）他、後半1979年以降は「杵屋」（八代西）をホームグランドとして活動している。

11時　総合司会井上潤により例会始まる。

開会の辞　鈴木忠夫

第１部は60年前を回想しＳＰレコードによるコンサート。音源は会員有志６名（内１名は故人）の持寄り。蓄音機は1930年イギリス製ＨＭＶ194を使用。機械の提供は福島繁博。彼はたつの市在住、蓄音機の研究とＳＰレコードの収集で知られている。

当初は1927年アメリカ製クレデンザと２台使用する予定であったが、クレデンザは開場設営中にトラブルがあり使用不能となる。60年前のレコード再生は電気蓄音機を使っていた。蓄音機の使用は記憶にない。

11曲中「ベサメ・ムーチョ」、「ルンバ・タンバ」の２曲がルンバ、あとはタンゴの構成。「ラ・クンパルシータ」（Ｆ．ロムート楽団）は会創立者の愛聴曲で、会としても重要な曲目。

「エル・オンセ」：Ｃ．ディサルリ楽団
「チャラムスカ」：Ｑ．ピリンチョ
「タンゲーラ」：　フランチーニ・ポンティエル楽団

あたりは当時のＳＰレコード、初期のＬＰレコードでなじみの曲で大変懐かしい。

「カリジョン・デ・ラ・メルセ」：Ｏ．Ｔ．Ｖ．
「エル・レイ・デル・コンパス」：Ｊ．ダリエンソ楽団

の２曲はレコードがなく後年聴いたと思う。「タンゲーラ」と「エル・レイ・デル・コンパス」

の２曲は、時間の都合で午後に食事をしながら鑑賞した。

12時より親睦、休憩を兼ねて昼食会。島本会長が会を代表し60周年のあいさつ、山本雅生氏より祝辞を頂戴し、乾杯の発声をお願いする。

「サルー！」

昼食は本格的中華（北京）料理を賞味する。食事、歓談、ビールびん片手にテーブルを巡る人もいて宴会モードに。

食事中、用意したＣＤでＢＧＭを流す。

「エル・オンセ」：　Qto. ピリンチョ
「エル・チョクロ」：ドン・フロリンド６重奏団
「ラ・クンパルシータ」歌：オルガ・デルグロッシ他

13時　タンゴ・グレリオ演奏会
ギター：　　米阪隆広（池田市在住）
バンドネオン：星野俊路（大津市在住）

2010年結成。関西を中心に活動する中堅タンゴ・コンフント。

楽団結成の由来を米阪氏に聞く。楽器の組合せは星野氏がギターと決める。共演者を探し関西のギタリスト数名の中から米阪氏を選んだという。アコースティック・ギターなので落着いた雰囲気をねらったのか？

この由来からするとバンドネオン主体のようだが、米阪氏のサポート、時折みせるギター・ソロも素晴らしい。

１曲目「マレーナ」から２人の意気の合ったメロディー、ハーモニーが流れる。

「デスデ・エル・アルマ」は2013年１月発売のファースト・アルバム（ウッドノートＷＮＣＤ－1007）のタイトル曲になっていて、楽団のテーマ曲的なものらしい。

米阪氏が「ピアソラも好きです」というように、ピアソラの作品も違和感なく聴ける。

プログラムの８曲はすべて楽団側の選曲。こちらからは11月なので「エル・オンセ」をリクエストしたが、「レパートリーにありません」と云われた。

予定した８曲が終わりアンコールは次の２曲。

９曲目「ウン・プラセール」（ビセンテ・ロメオ作曲）

星野氏はバルスがお好きなようで、１曲目はバルスとなった。

10曲目「ラ・クンパルシータ」（G. H. マトス・ロドリゲス作曲）

タンゴの有名曲が今回はアンコールに。エンディングのルイス・モレスコのバンドネオン・バリアシオンで場内が盛り上がる。

閉会の辞　鈴木忠昌

14時終了後、ステージ前で会員に出演者など関係者を加え記念撮影。約30名の中に日本タンゴ・アカデミーの会員は７名。

山本雅生氏、山田建雄氏、冨田稔氏、吉澤義郎氏、井上潤氏、鈴木忠夫氏、鈴木忠昌氏

上田登氏は会には参加されたが撮影時不在。

写真撮影は吉澤義郎氏にお願いした。後の看板の文字は会員･藤枝一彦氏の隷書体による力作。

今回の特別例会はお陰様で出席者64名の盛会となった。遠方は名古屋、京都、大阪、岡山、高松、丸亀からご参加頂いた。

演奏グループ・グレリオのお二人は、第１部、昼食会から一般テーブルに同席、会員並の扱いとなった。出演者控室なし、本番前リハーサルなし、というのは初めての経験、お二人共主催者側に比べ格段にお若い、これからも末永くご活躍を。

この度の創立60周年記念特別例会は、皆様のご支援、ご協力により無事終了した。明日からはこれを活力源として61年目以降の活動につなげていきたい。

次は12月例会・第547回タンゴコンサートを予定している。

12月13日（土） 18時～ 20時

会場　杵屋（西八代）２Ｆ

「レメンブランサス」「アディオス・パンパ・ミーア」などＣＤ、テープ使用のコンサートを開催する。

ありがとうございました

2014年12月12日・記

姫路中南米音楽愛好会 創立60周年記念特別例会　2014年11月16日(日)　姫路　北京閣

いわき中南米音楽同好会10周年記念に参加して

藤木立夫（横浜市）

秋の深まりと共にふと見上げる空、雲の動きにお天気の不安を抱きつつ、11月11日（火）～12日（水）１泊２日の秋の親睦の旅に出掛ける。行く先は、常磐線いわき市泉駅より車で10分程の小名浜海岸、ゴルフ場を兼ね備えた小名浜オーシャンホテルである。都会の喧騒を避け、集まった仲間達にとっては、太平洋を眼前に臨む風光明媚なホテル。海と温泉での１泊はさぞ心身を癒す最高の地と思えた。

このたびの主催は福島県の「いわき中南米音楽同好会」である。東京から「タンゴ・スエニョス」（タンゴすいよう会）、と「タンゴ倶楽部ノチェーロ・ソイ」、そして地元の「福島タンゴとフォルクローレの会」の協賛・協力を得、日本タンゴ・アカデミーの後援のもと、いわき中南米音楽同好会10周年の記念すべきイベントが開催された。また秋田からも、「秋田中南米音楽同好会」会長の佐藤勝夫氏、小澤忠氏の二人（ともにNTA会員）の参加もあり、この記念の会の参加者は総勢約100名にも及ぶ、稀にみる盛大な記念パーティーであった。

“今日はたっぷりタンゴ三昧”と銘打ち、パーティー会場は万端整い、広いホールは地元いわきや福島の会のメンバーが待ち受ける中、遠来組がホテルに到着する。会場に案内されて各々即座にテーブルに着く。定刻14時30分に本日の会の火蓋が切られる。早速、主催者を代表して佐々木秋雄会長（NTA会員）より歓迎の挨拶。引き続き地元各会代表の紹介、乾杯の音頭に続き、NTA会長飯塚久夫氏よりこのたびの10周年記念のお祝いの挨拶があった。

第一部 タンゴ生演奏によるダンスタイム（15：00～）

マエストロ黒木皆夫氏（NTA会員）率いるタンゴスエニョス五重奏団、もう既にステージにそろい踏み。早速、飯塚会長により曲の進行と解説を担当。幕開き、ファンファーレと思える１曲は、“黄昏のオルガニート”から始まる。特設ホールに、タンゴスエニョスの代表カップルが先陣を切って華麗な足さばきを披露し、会場一同固唾をのむ。続いて曲は“フェリシア”、“ガウチョの嘆き”と他のカップルも先陣に釣られホールがほぼ埋め尽くされるほどに馳せ参じる。４曲目の“フマンド・エスペロ”はスエニョス楽団の専属歌手ユリ・アスセナ（NTA会員）の得意の曲、タバコを口に咥えての熱演は会場の大きな喝采を浴びる。引き続き、サロンに相応しく踊り易い曲を選曲。前半10曲の演奏を終え、一息つく。

次いで、タンゴダンスに関し一見識のあるタンゴ倶楽部「ノチェーロ・ソイ」の宮本政樹氏（NTA会員）がアルゼンチンタンゴのサロンダンスの楽しみ方についての説明があり、「タンゴ・スエニョス」と「ノチェーロ・ソイ」の会員から５組のカップルが選ばれて、いつもミロンガで踊ってい

るようなサロンダンスのスタイルのデモンストレーションを披露する。踊り易いフランシスコ・カナロのワルツで“ロンダ・デル・ケレール”とカルロス・ディ・サルリのタンゴで“エル・シルーハ”を一曲ずつ。再び、後半はスエニョス楽団の演奏、ユリ・アスセナの２曲の歌入りで、日本のタンゴを含め９曲演奏したところで生演奏のミロンガを見事に終え、前半一部を終了する。

幕間の中休み

喉を潤す、待ちに待ったビール・ワイン・日本酒の飲み放題…テーブルに次々に運ばれる盛りだくさんの海の幸、各テーブル８名が改めて乾杯、喜び合っての歓談は誠に微笑ましい。

第二部 NTA会員の各会代表によるレコードコンサート　18：00～

コメンテーター７名による２曲選（氏名とその所属の会のみを記す）

飯塚久夫（NTA会長）
清水　裕（ネリマ　ラテンタンゴ倶楽部）
宮本政樹（タンゴ倶楽部ノチェーロ・ソイ）
佐々木秋雄（いわき中南米音楽同好会）
石原利祐（タンゴすいよう会）
佐藤勝夫（秋田中南米音楽同好会）
島崎長次郎（NTA名誉会長）

CDによるレコードコンサートが始まり、４曲から５曲目のタンゴがかかると、バイレ組は再びフロアに参じ踊り始める。東京からの参加メンバーの大勢は、レココン趣向でなく踊りを楽しみにして来たメンバーであることに、ステージ前面に座した一部の人のみが聴き入っている姿に、地元の会の人達には、どのような思いが眼に映ったであろうか。少々奇異な感じがしたのでは…。状況と場所の兼ね合いが難しくもあり、折角のコメント付きのレココンは、その場の雰囲気から何となく違和感をさえ思えた。

第三部 カラオケ大会

各会２名選出のカラオケ大会は、流石にステージに上がった歌手（？）たちの持ち歌は、声量といい見事な歌唱力である。歌も実に巧い。場内に流れる曲もがらりと装いを変え、アルゼンチンタンゴのリズムからトロピカルリズムに；ルンバ、サンバ、チャチャ、マンボ、ソシアル系の人達へのブルース、ワルツと選曲も豊富に。演歌もある。地元の人達も社交ダンスならば待ってましたとばかりに、踊りの輪に加わって、フロアーでの盛り上がりが熱気を帯び、楽しい雰囲気になってきた。宴たけなわの時～全員の合唱である。歌詞が配られ、その歌は、今夜のパーティーに相応しい“君恋し”である。フランク永井のタンゴバージョンで参加者全員の心が一つになっての大合唱であった。今宵も更け～幕となる。21：30。 なお当日は地元の新聞「いわき民報」からの取材があり、11月20日号に写真入りでこのイベントが大きく取り上げられた。

二日目 紅葉の名所夏井渓谷へ

朝食もそこそこに、９：00ホテル出発、中型ワゴン車と小型ワゴン車の２台に分散して乗り込

む。佐々木会長のガイドでいわき市内ののどかな風景を車窓から眺めながら、ふと、あの大惨事３・11、此処は福島県であることが…　震災被害、原発事故に遭い、未だ放射線の影響に依り仮設住宅に留め置かれている人達の事が脳裏をかすめる。車は予定の願成寺に到着。国宝阿弥陀堂を拝観する。仏堂の前に広大な浄土庭園があり、周囲は見渡す限りの色づいた紅葉。続いて夏井渓谷の紅葉の名所、背戸峨廊（せとがろう）へと…　車から降りて、川のせせらぎに足を止め、紅葉を眺めながら川辺りを散策する。再び車へ、一路いわき駅近くの寿司屋へ行き、定刻正午のお昼時、寿司をつまみながら歓談を…　そしてＮＴＡ島﨑名誉会長より全員を代表して佐々木会長へお礼の言葉を申し述べ解散となる。

最後に一泊二日の旅を心ゆく迄愉しませていただいたことに、心から感謝したい。

後　記

福島いわきでの多くの人の参加を得て、見事にいわき中南米音楽同好会10周年記念の会が盛大に行われたことは、佐々木会長始め関係者各位の賛同・協力が功を奏したことに他ならない。このたびの記念の会は、今後の東北地方への各会の交流を、一層の推進を計るに相応しい新たなる一石を投じたことは間違いないと思う。

日・祝日休刊）
夕刊 いわき民報
●THE IWAKI MINPO●
2014年（平成26年）11月20日（木曜日）　第20864号

思い思いにパーティーを楽しむ出席者たち

各同好会間の情報交換は当然のごとく普遍的に行われていると思われるが、人的交流があって初めてその情報が有機的に作動し、その双方の親睦が他方へより一層の効果を高めてゆくことであろう。

宴会終了後、宮本NTA広報企画担当理事の発議のもと、折角の機会、秋田中南米音楽同好会会長佐藤氏、小澤氏、両氏を囲み島﨑名誉会長出席のもと、他３名がホテル一室に集まり情報交換が行われた。秋田の同好会はその現状及び地域の特殊性をも踏まえ、会の運営を長年（50年）継続されてきた体験実績から、その地域性故ややもすると孤立しがちになる処、積極的に周辺地域の会との交流を計ってきた。会員20名の少人数での会であり、交流の機会を重ねることに依り、一層の親睦を深めながら、長年に亘って会を維持継続してきたという事である。そして今後、東北一円のみならずシェアを広げ、リンコン開催の糸口を…　との提唱もあり、今後NTAとして、新しい年を迎え、具体的にこの案件の促進を計られることは意義深いものと思われる。

ノチェーロ・ソイ蓄音機 SP タンゴ鑑賞記

西川　薫（さいたま市）

６年目となった師走のSPコンサートが12月23日（祝日）ニュー新橋ビル３Fの「カフェ・コンセント」で開催された。今回は趣向を変えて地方のベテラン愛好家を招聘したことで、SPタンゴ・コンサート・ミニ全国大会の趣きである。この企画に好奇心を覚えフレッシュさを感じたのだろうか、動員人数の多さ（70名）がそのことを裏付けたようだ。参会者は殆どお互いが顔馴染みでそれ故に和気藹々とした雰囲気が会場の空気を和らげ、加えて会費1,500円でアルコール付きと言う大変幸せな気分になれる空間と時間である。通常の例会同様下戸の方々にはソフト・ドリンク飲み放題という仕掛けも嬉しい配慮でした。

プログラムの構成はノチェーロ・ソイを主宰する宮本政樹氏（当会理事でもある）によるコメンテーターの紹介を添えて第一部が地方在住のコレクター５人による３曲選、第二部が恒例となった当会名誉会長島﨑長次郎氏の解説で、プログラムは＜古き佳き時代のタンゴを訪ねて＞と題しふたつのサブタイトル付きで構成されていた。

勝原氏

陳氏

高田氏

佐藤氏

吉岡氏

島﨑氏

＜タンゴ愛好家による３曲選～思い出のレコード・好きなレコード～＞

第一部最初のコメンテーターは近年名古屋蓄音機クラブを立ち上げた四日市市在住の勝原良太氏（当会会員）の登場です。あるとき東京で聴いた蓄音機（クレデンザHMV163）デモで流れるタンゴに金縛りとなり即座にその名器を購入したと言うHMV礼賛者で、現在は古いタンゴしか聴かないという一徹さが選曲にも現れていました。「Araca, corazón（フアン・マグリオ楽団）」、「Ladrón（J. C. コビアン楽団／フィオレ歌）」、「Lamento（R. キロガ歌）」の３曲だ。「Araca, corazón」は作者デルフィーノやカナロ、トロイロ、バレーラ、ガルデル他かなりの録音が遺されているので聴く機会もあるが、後者２曲は馴染みが薄い。「Ladrón」多くの名作を書いたコビアン作品の中では無名曲でほかに録音は多分無いだろうが、規則的に駆け上がり駆け下がる音符の動きがユーモラスで、またバイオリンの作る音の流れが軽妙である。こういう出会いがあるからレコ・コンは楽しい。最後の曲は電気録音以前のラッパ吹き込みで、伴奏するpf. bn. vn.の情報を拾い切れない骨董品的な音が曲想とキロガの歌い口にマッチして妙に感傷を誘った。勝原氏は10ヶ月間フアン・マグリオだけを聴いたり、最近半年ほどは95％キロガばかりを聴いているとのことで、その頑固さがフロアの笑いを誘いましたが、まさに尋常ならざる入れ込みようである。

次いではるばる山口市から馳せ参じた陳昌敬氏が紹介された。東京在住時代はノチェーロ・ソイのスタッフであり当会にも籍を置いた時期があるだけに、今回の参会者にもよく知られたタンゴ・ファンである。自分自身“偏った人間で古いものしか聴かない”と宣っている。デ・カロ大明神信奉者であることから、鋭敏な音楽感性の持ち主だと僕は評価している。今回紹介された曲は「Mientras mi madre llora（C. マルクッチ楽団/H. サモーラ吟唱）」、「Lorenzo（J. デ・カロ楽団）」、「Nieve（A. マガルディ歌）」。１曲目はサモーラ吟唱に続くバンドネオン変奏が聴かせ所であり２曲目デ・カロの当時としては斬新なアレンジが水準を凌駕しているのに、両者その良さが充分に再現されていない。ところがマガルディの「Nieve」は一変して彼の声が前面に浮き出てきた。カンシオンの形式を採った一種のプロテスト・ソングと言えようが、マガルディの哀切極まりない創唱が見事に再現されている。ひょっとすると蓄音機は歌モノに対して一番その能力を発揮するのだろうかと考えさせられた。とまれ陳氏の意表を突く選曲には聴くたびに驚かされる。

３人目は大阪から参加した高田幹雄氏（ビダリータ・ラテンクラブ）で、持参した曲は「Malucha（Fco. プラカニコ楽団）」、「Era un budín（Fco. ロムート楽団）」、「Botija linda（O. T. ビクトル）」。氏のテリトリーは中南米からイベリア半島までの広大なエリアに跨がっており、その知識も半端ではなく大変奥深い。その氏がタンゴを聴き始めたのはすでに解散した大阪タンゴ・クラブのSPコンサートの会場であった由。当初はノイズが多いこんなレコードをよく聴くもんだな、と思ったそうだが、いつの間にかその魅力に取り込まれ今ではタンゴの比重が一番多く、特にバイオリンの音色がたまらなく好きだそうです。一曲目に紹介された「Malucha」は感傷的で素朴な演奏だが、バイオリンの泣き節（M. フランシアまたはE. バルダーロ？）が印象的。「Era un budín」は可も無し、不可も無しだが、「Botija linda」はバイオリンのオブリガードが随所に散りばめられており、流れ去る旋律には刺激的なところがひとつも無く演奏も音も素直、よき時代のふくよかな香りが会場全体を包み込んでいた。高田氏は今回が東京デビューとあって緊張したせいか、本来の柔らかくまろみのある大阪弁独特の語り口が生かし切れていない恨みがあった。

次回機会があればもう一度聴いてみたい。

４番手は秋田中南米音楽同好会を切り盛りする佐藤勝夫氏（当会会員）が、２名の会員（うち１名は当会会員）を伴って参加された。この同好会は京都、新潟に次ぐ60年以上の古い歴史を持ちタンゴに限らずフォルクローレ、カリブを含むラテンなどの音源を持ち寄り、バランスのとれた例会を運営している。特筆すべきは広く他県の同好会とも交流があり、定期的な合宿コンサートを長年にわたって開催していることにある。今回の出し物は「Vieja guitarra（R. キロガ歌）」、「La randa（M. シモーネ歌）」、「La última copa（C. ガルデル歌）」と歌モノばかりを並べてきた。冒頭宮本氏から“東京さ出てこい！”と気合いを掛けられたことに触れた後、“クレデンザのような高級な蓄音機の音は地方ではちょっと考えられない、その引力に引かれてやってきた”、と親近感と懐かしさを抱かせる秋田訛りで座を和ませた。虚飾の欠片もなく訥々と語りかけるキロガは目を閉じるとまるで眼前にいるような臨場感を覚えるし、ギターの一音一音がはっきりと聴き取れHi-Fiではないのに不思議な感覚である。シモーネ、ガルデルしかり、夾雑物のないまことSPならではの音である。氏は島﨑氏がことあるごとに放つ“HMVは歌がいいんだよなァ”を引用し“俺の物（卓上型蓄音機）とは違うなァ、惚れるというのは本当だ！”に爆笑の渦。ボーカルを３曲続けて聴いてみて、きっと当時蓄音機はクラシックSPでも厚みのあるフル編成のオーケストラより、少人数の弦楽三重奏・四重奏やオペラなどの歌モノに本領を発揮したであろうと勝手な推測をしている。

最後に勝原氏と同じ四日市市から参加した吉岡達郎氏（当会会員）が第一部を締め括った。毎月開催する三重タンゴ・アルヘンティーノのレコ・コン音源はSPだけにこだわっており、他の同好会にはなかろうと自負している、とのことでこれは凄い。氏はフアン・マグリオ楽団の咽び泣くようなバイオリンの調べに魂を奪われ、急速に傾斜していったそうです。“フアン・マグリオは特別タンゴ史上に功績のあった人ではないが、それなりの小さな功績は評価できる。E. バルダーロ、J. ポリト、R. ビアジ、A. トロイロらを10代の頃より目をつけ育成してきたのはパチョです。亜国では数10年後には忘れ去られる存在かも知れないが、日本では永遠にして不滅であると信じている、長島みたいなことを言いますが…”で会場からは笑いと賛同の拍手。紹介した曲は当然フアン・マグリオ楽団のみで「Pedacitos de papel」、「Arrepentido」、「Cuando llora el corazón」の３曲で、一曲目は地味な演奏だが後者２曲はいずれも名演で滋味あふれる旋律が心を打った。最後の曲のエストリビジョはC. ビバンだろうか？　“フアン・マグリオは1934年７月に世を去ったが私はその８月に生を受けたパチョの生まれ変わりであり、死ぬまでパチョを愛していく！”に会場粛然。

これで第一部は終了したが５人15曲のうち30年代録音が２曲で、残り13曲はすべて20年代の録音で占められていた。アクースティック録音１曲を除き電気録音開始から数年間に集約されていることにSPコレクターの好みの傾向が窺い知れた。

会場が広い、いかに名器クレデンザと言えどもアクースティックの生音を四辺に響き渡すには流石に重荷、そこで筐体ラッパからの原音に加え音の出口にマイクを立てアンプ増幅で外部スピーカーからも出力するという方法を採っていた。横道に逸れるが、２年前に日本初の国際的バイオリニストである諏訪根自子13歳から15歳時（1933－1935）録音のSP盤（日本コロンビアに保存されていた一部金属原盤との比較を含む）の完全復刻アルバムが発売された。ビクトローラ・

クレデンザ、グラモフォン・モデル194、ブルンスウィック・バレンシアなど蓄音機からの直接音をマイクで集音しダイレクト録音した全集で、天才少女の高貴で品の良い音色が見事に復元されている。この事例からも広い会場でのノチェーロ・ソイの蓄音機の音出し方法は理に適ったものと言えるだろう。

＜ヨーロッパの哀愁を紡いだタンゴの精鋭たち＞

第二部はすっかり年末の蓄音機コンサートの顔となった島﨑氏（当会名誉会長）の登場で二部構成となっている。冒頭クレデンザについて簡単な説明があった。“ビクトローラ・クレデンザ（米国）は音を出すラッパが合板で出来ており柔らかでクラシックなどではふくよかな音を出しているが、グラモフォン・クレデンザ（英国）は鋼板を採用しておりタンゴの響きは絶対にイギリス製HMVだな、というのが仲間内での定評です。蓄音機は確かに音は小さいかも知れない、しかし出てくる音はえも言われぬもので、まさに蓄音機サウンドと言える。”なるほど、なるほど。また氏が繰り返し述べていることに、“ヨーロッパ録音のタンゴは当然のことながら歴史を刻んだ欧州の色合いが濃い、ひとつはロマンであり、一つは哀愁である。潤いがあり人の心を癒やす。”がある。今回もアルゼンチンからヨーロッパに渡った演奏家たちによる「Llorando en el andén（M. フローレス楽団）」、「A la luz del candil（C. ガメス歌）」、「Lágrimas（トリオ・アルヘンティーノ）」、「Chiqué（C. カスティージョ楽団）」の４曲が並んだ。M. フローレスはマエストロ・カルロス・フローレスのことで、アンプを通して聴くような音域の広がりは希薄だが、とてもブエノスの香りがする演奏だ。C. ガメスの唱法はA. マイサニに通じるところがあるが、これが当時の舞台経験者によるスタンダード唱法だったのだろうか。彼女については故芝野史郎氏執筆のタンゲアンドNo.27、P.55を再読すれば理解がより深まるでしょう。「Chiqué」はバルセロナの寄せ集めの集団ではなくブエノスから帯同した本場のメンバーで固めた録音だけに嫋やかながら格調高い演奏で、曲が終わると“ブラボー！”の声で盛り上がった。

＜タンゴ史を飾った名匠たちの心打つ遺産＞

用意された曲目は「Plegaria（O. フレセド楽団/R. ルイス歌）」、「Mi noche triste（C. プグリッシ楽団/R. ディアス歌）」、「Sonaste, viejo（J. ポジェーロ楽団）」、「El penado 14（J. デ. カロ楽団）」、「Mala suerte（R. キロガ歌）」、「Lirio azul（J. ギド楽団）」、「Ojos que brillan（O. T. ビクトル）」、「Alegre despertar（R. フィルポ楽団/C. バレーラ歌）」、「Por esa mujer de carnaval（Fco. カナロ楽団）」、「La cumparsita（ロス・プロビンシアーノス楽団/R. ディアス歌）」の全10曲だが、最初の「Plegaria」は40年録音のハープやビブラフォンを配した大編成楽団で本来ならダイナミックで流麗な演奏の筈が、再生レンジの狭さ故重厚な低音域やビブラフォンの倍音が再現し切れない嫌いがあった。曲そのものはE. ビアンコの作品だけにヨーロッパの牧歌的な丘陵地帯の風景を充分イメージできた。それ以外の曲では「Mi noche triste」、「El penado 14」、「Lirio azul」、「La cumparsita」など名だたる名曲・演奏に互して、個人的には小細工なしにユニゾン主体で素直な演奏の「Sonaste, viejo」、出だしのギターの音が堅く乾いた印象を受けるものの誰に聴いてもらう訳でもない、自分に語り聞かせるような節回しにこの人の真骨頂が切々と響くキロガの「Mala suerte」、押し気味のテンポで歯切れ良い主題提示に続くエストリビジョの後のバイオリンによ

る終曲部の高音域オブリガードのうねり咽ぶ美音が印象深い「Alegre despertar」などが印象に残る曲であった。蓄音機に関する蘊蓄や高山正彦、大岩祥浩、芝野史郎各氏ら故人となった大家のエピソードを挿入したトークの面白さと笑いに包まれた島﨑ワールドで幕を下ろす、古き良き時代の馥郁とした調べに浸りアッと言う間に過ぎた３時間半でした。

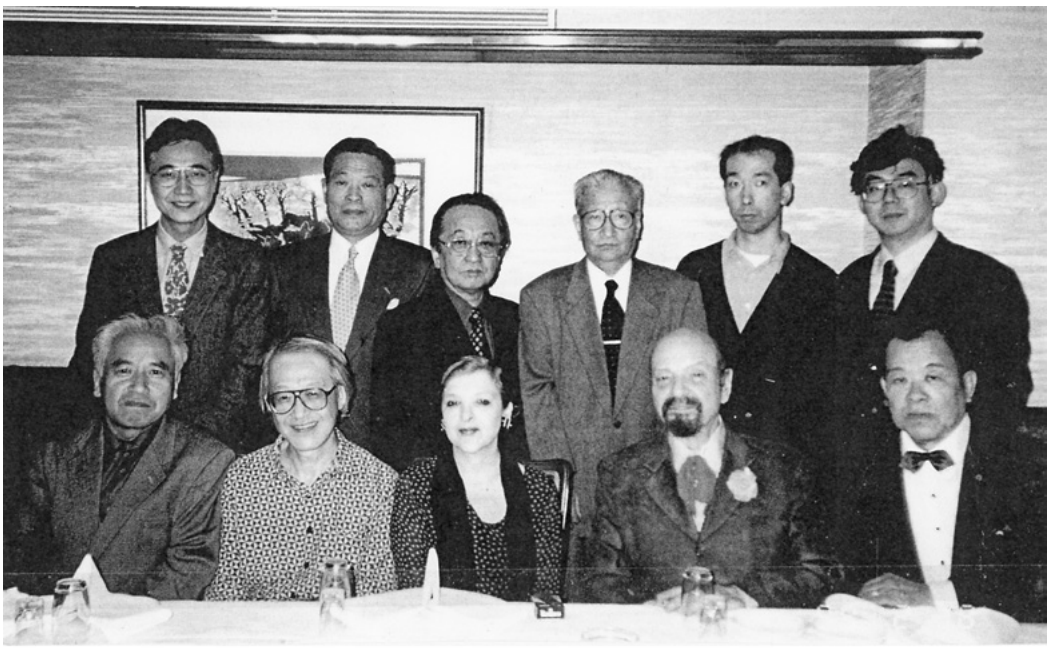
今回のコンサートの目玉は地方の愛好家にフォーカスを当てた好企画であったが、この方々は皆遠方からアゴ・アシ・ヤド自前で参加している。秋田からの同行者もしかりで皆さんのタンゴにかける熱き思いに感服した。なおノチェーロ・ソイのレコ・コンは開催の都度運送業者による機材の搬出入、無償で奉仕する音響セッティングと音出し操作・会計管理などの協力者の目に見えないボランティア活動で運営されている。この方々へ敬意を表しつつレポートを締めくくる。

（2015.1.31）

※資料：１．ノチェーロ・ソイ・プログラム

追悼　オラシオ・フェレール　もう一枚の写真

（Tangueando en Japón 第３号：1999 年３月発行より再録）



〔フエレール氏夫妻を迎えての当会役員による懇親会〕
1999／2／18. 上野の中華料理店にて
後列左から、岩岡. 島崎. 高野. 大岩（会長）. 齋藤（会員）, 西村
前列左から、蟹江. 高場（副会長）. フェレール夫妻. 木田.

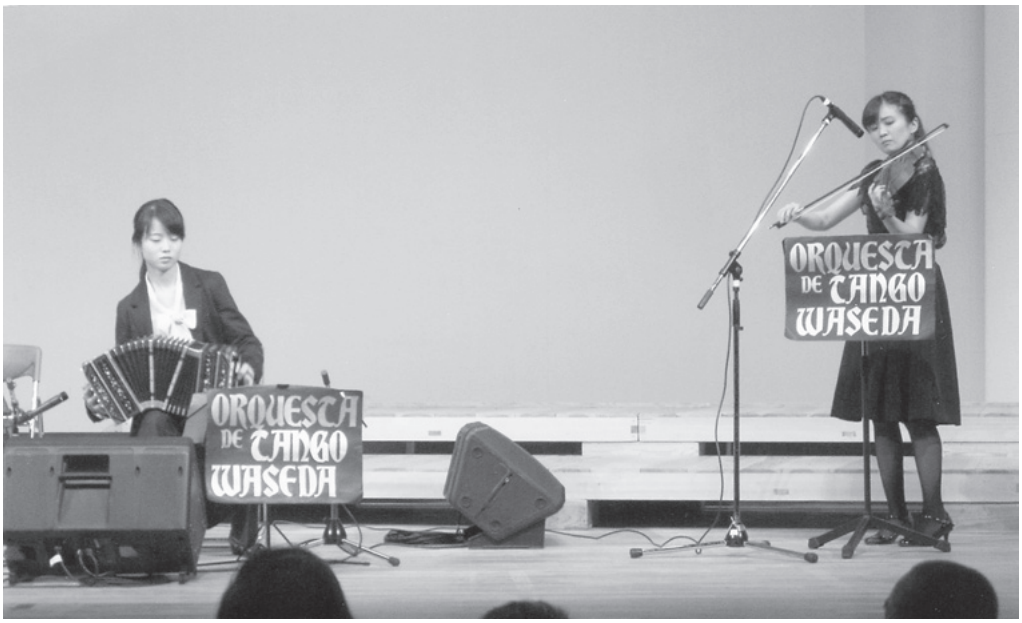
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ 第53回　リサイタル

笠井　正史

2014年もあと少しという12月27日（土）毎年末恒例のオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダのリサイタルが開催された。今年は第53回で、JR中野駅最寄の「なかのZERO小ホール」で催されたが、550席満席という盛況であった。タンゴのコンサートというと、とかく高老年中心の聴衆が普通であるが、この日はそうした年齢層の他に、大学生や出演者のＰＴＡならぬ家族・親族も多々聴きに来ていたようである。

今年のリサイタルは３部構成で、第１部は一般に耳馴れた曲目を代表的な演奏家のアレンジを中心に展開、第２部は４重奏乃至５重奏でアストル・ピアソラの曲目を中心にコンフントの出来栄えを紹介、第３部は昨今のタンゴ・ワセダ好みの比較的新しい曲目を披露、といった具合で構成された。

第１部冒頭の「トロイレアーナ」に始まり、日本タンゴ・アカデミーの飯塚久夫会長の司会で演奏曲目が次々に紹介されていったが、毎度のことながら、タンゴ・ワセダの場合は楽器の数より演奏者の数が多いので、ピアノ（学生さん達はこれを「ヤノピ」と呼ぶらしい）やコントラバス、つまりベースもしくは「スーベ」は曲によって「選手交代」で演奏された。



今年はタンゴ・ワセダとしては画期的な試みとしてバイオリン奏者の具利珍がアストル・ピアソラの「ジョ・ソイ・マリア」とエンリケ・サントス・ディセポロの「スエニョ・デ・フベントゥー」をボーカルで披露し、拍手喝采を浴びた。具利珍はスペイン語も堪能なようで、以前からタンゴの歌を歌っていたようであるが、公式デビュー？はこれが初めてのようである。

これまでのタンゴ・ワセダのリサイタルではオスバルド・プグリエーセの曲目が主体であったが、今回は弟子のロベルト・アルバレスの「チャカブケアンド」１曲で大幅に演奏曲目の構成を変えてきていたのは矢張り、学生バンドの年次世代交代によるものかと思われる。毎度のこと乍らこのタンゴ・ワセダの凄いところは、何か今まで演奏したことがない曲で、仮に譜面が入手できなくても耳で聴き覚えそれを採譜してモノにするという技法が伝統的にあるようで、今回もレオポルド・フェデリコの「ア・トーダ・オルケスタ」はその手法でレパートリーに加えたとのことである。

また、この楽団のもう一つの強みはタンゴ・ワセダに加わりたいという申し出があれば他大学の人でも「ワセダ」として採用していることである。現在もバイオリンの加藤里奈は津田塾大学、コントラバスの嵯峨山琴音は日本女子大在席の学生である。こうした人材獲得術は他の大学でも是非見習って欲しいところで、嘗て活躍した大学のタンゴ楽団が、新入生を確保できない侭、次々と姿を消して行ったことを考えると、ワセダ以外の大学のオルケスタでも同様の手法で人材確保をしていれば、楽団そのものが継続できたのではないかと繰言を言って仕舞うのである。2013年、2014年と既に２回タンゴ早慶戦が東京で開催されたが、慶應義塾大学では現役のオルケスタは既になく、ＯＢのみが参加している。実行委員の話では中央大学や明治大学も嘗ては錚々たるメンバーがタンゴの演奏を披露していたそうで、人材さえ確保できていれば各大学でも引き続きタンゴ演奏家が育っていったのではないかと思う。

第２部以降の演奏の合間に司会の飯塚氏が３年生の演奏者を６人紹介していったが、その６人はいずれもこれまでタンゴ・ワセダの屋台骨を支えてきた優秀なメンバーである。処が同オルケスタの決まり？で年次リサイタルを以て「引退」するため、来年からは「就活」時期に入るということで表舞台には出てこない由、体育会系の世界では４年生も引き続き現役であることを考えると何か寂しいというか勿体ないような気がする。因みに、その６人とは：

ピアノ兼バイオリンの川上彩子（幹事長兼パートリーダー）
バイオリンの高橋雪花（バンドマスター）
バイオリン兼ボーカルの具利珍（パートリーダー）
バンドネオンの大三輪柚季（マネジャー兼パートリーダー）
コントラバスの高橋優介（パートリーダー）
ビオラの竹尾礼助

である。この中、川上彩子は幹事長としてオルケスタの代表を務める一方、演奏者としては曲目に応じてピアノとバイオリンを弾きわけるという離れ業をやっており、後輩達がこの人ならとついて行くのも納得できる。

この３年生６名が退団してしまうと後はもぬけの殻になりはしないかと少々心配であるが、タンゴ・ワセダは既に創立以来63年の間、年々代替わりしても卒業生の厚い支援があり、４月には

また新入生を迎えて、最初は「これがタンゴか？」と憂慮したとしても週３回の猛練習で年末のリサイタルには堂々と難しい曲目を披露できるまでになる訳で、次の楽しみに繋がっている。先にも述べたように、タンゴ・ワセダは現在日本の大学で「現役」として活躍する唯一のオルケスタであるから、その灯を絶やすことなく連綿と続けて行って欲しいと願っている。また、そうした現役学生の活動を支援してゆくのも私達タンゴ愛好家の務めでもある。

コンサートのプログラムは最後の曲「ア・トーダ・オルケスタ」で締めくくられたが、これでお開きになる筈もなく、当然の如くに「オートラ」が入り、「ラ・クンパルシータ」を在籍メンバー全員で演奏し、その間に司会の飯塚氏からパートと在籍学部・年次が紹介された。面白いのは複数の演奏者がいるコントラバスの嵯峨山琴音はクラリネットを、ピアノの神戸頌子はサックスを演奏していたが、ご愛嬌というより、まさに全員野球ならぬ全員演奏を心掛けたこのオルケスタならではの快挙として、チームワークの良さを再認識させられた一幕であった。演奏の終わりにオルケスタを代表してバンドマスター（なぜかタンゴ・ワセダではマエストラとは言わずにバンマスと呼んでいる）の高橋雪花が大向うから「泣くなよ」の声が掛かる中、現役最後の挨拶をきちんとこなし、２時間少々のリサイタルは満足と称賛のもとに終幕となった。

「奈良タンゴ祭」

和田　ひろみ（奈良市）
協力：吉澤義郎

2015年１月10日、やまと郡山城ホールで第１回「奈良タンゴ祭」が開催された。それは、細々と奈良の地でタンゴを愛して来た私（和田）の、未だタンゴと出会わない人々への「想いの届く日」でもあった。開場時間前には、早くも人々が並び始め、整理券が発行されるほどで、会場入り口付近は人々の熱気が満ち溢れていた。その光景を見て私は、１年に及ぶ北村寛氏（バンドネオンの北村聡氏の父君）の並々ならぬご尽力と、慣れぬチケット売りに奔走した私の半年間も思い出され、感無量だった。

「なら、どっとＦＭ」局長中川直子氏の司会で、スタートは「ルス･デル･シエロ」の２重奏、続いて「シンコパwith kazzma」の５重奏でKaZZma 氏の歌は「タンゴの街」と「白い自転車」の２曲。

豊かな声量が素晴らしく、大きな拍手と“ブラボー”の声が飛んだ。続いて会場が沸きに沸いたのが「トリオ・ロス・ファンダンゴス」だ。ヴァイオリンの谷本仰氏の巧みに笑いを誘う話術と いわつなおこ氏の抜群のアコーディオン、秋元多恵子氏の迫力あるピアノ。真っ赤なステージ衣装で、大拍手・大歓声の中で会場を文字通り炎上させた。

後半は大和郡山市市長上田清氏のご挨拶で始まり、続いて「タンゴ･グレリオ」の登場。ギターの米坂隆広氏の訥々とした味のある語りのあと、星野俊路氏のバンドネオンとの２重奏が本格的なタンゴを展開した。続いての「ジャノタンゴ」４重奏は洗練された演奏で、バンドネオン北村聡氏の華麗なテクニックに大きな拍手が沸いた。また、熊田洋氏の自在なピアノは冴え渡り、最後の曲は熊田氏自作の「赤と黒」。スタンディング・オベーションの中で惜しみない拍手と“ブラボー”が湧き上がった。

そしていよいよ最後は「アストロリコ」の登場。バンドネオンの門奈紀生氏からは静謐なオーラが会場に流れて来て、門奈氏の存在そのものがタンゴだった。その禅にも似た情感に観客は既に共感していて、麻場利華氏の繊細かつ情熱的なヴァイオリン、平花舞依氏のダイナミックなピアノ、そして活躍著しい滝本恵利氏のコントラバスの４重奏が始まると700人の観客が吸い込まれるように魅了されるのが肌で感じられた。また亮＆葉月のペアーによるダンスには、溜息と感嘆の声、大きな拍手に加えてあちこちで“ブラボー”が叫ばれた。

気が付けばフィナーレ。アンコールの拍手は鳴り止まず､「アストロリコ」が「ラ･クンパルシータ」を演奏している舞台に出演者全員が登場。会場は更に熱気に包まれた。そして舞台最前列に

整列した24名の出演者に客席から１本ずつバラの花が手渡された。演奏者と観客がタンゴで結ばれて欲しいという私たちの願いの象徴のバラだ。

３時間の熱いステージは一瞬のように過ぎた。それは第１回「奈良タンゴ祭」にかける出演者および関係者全員の情熱が、相乗効果を起こして何倍にも膨れ上がり、私たちにひしひしと伝わって来て感動また感動の大きな渦を巻き起こしてくれたからだ。この渦を次回へ、引き続きタンゴファンの皆様のお力をお借りして、“まほろばの地”奈良で「タンゴ祭」を続けて行きたい。

（筆者の和田ひろみさんは第１回奈良タンゴ祭の実行委員を務められた。（編集部））

お知らせ

明2016年は「ラ・クンパルシータ誕生100年」に当たります。これを記念し、日本タンゴ・アカデミーの事業の一環として下記のとおりCDを制作し、会員優先での頒布を計画しています。

お楽しみにお待ちください。

なお、詳細は、Tangueando en Japón誌次号（第36号）に掲載されます。

記

【ＣＤの概要】

島﨑名誉会長が半生をかけて蒐集されたオリジナル（SP）盤をベースにし、アルゼンチンを中心に、ヨーロッパやアメリカ、さらには日本など、幅広い音源を網羅、かつてなかった全集を予定しています。

「海を渡ったボルテーニョたち」の足跡（補遺－1）

ラファエル・カナロ

～フランシスコ・カナロ楽団パリ支店的存在～

齋藤　冨士郎

タンゴ演奏家としての経歴

我国ではラファエル・カナロの名前は今日では復刻LP,CD（A.M.P. CD-1167,CD-1176;A.V.ALMA, CTA-1005, CTA-951）を通して良く知られている。しかしラファエル・カナロ自身の伝記的資料はごく僅かにすぎない。

Rafael Canaro en 1934, cuando dirigía su orquesta en el Olympia de París.

ラファエル・カナロは1890年６月22日にウルグアイのサン・ホセ・デ・マージョ（San José de Mayo）でフランシスコ・カナロのすぐ下の弟として生まれた。ラファエルの幼少期に一家はブエノス・アイレスに移住する。周知のように貧困家庭であったので、幼少期は兄弟のフランシスコやフアンと共にエントレ・リオス通りで新聞売り少年（canillita）として家計を支えた。

音楽家としては始めギター奏者として出発した。しかし、ギターがタンゴ楽団の主要な楽器でないことが決定的になった1920年頃にルイス・ベルンステイン（Luis Bernstein）やロドルフォ・ドゥクロス（Rodolfo Duclos）のようなその時代の他の音楽家と同様にコントラバスに転向した。この頃のラファエルの演奏活動については資料に記述がない。

Mi Orquesta tal cual la presenté en París (23-4-1925) en el Dancing "Florida", Rue Clichy, Montmartre.

1925年にコントラバス奏者兼セルーチョ奏者としてフランシスコ・カナロのオルケスタのパリ公演に参加した。前頁の写真でコントラバスを弾いているのがラファエルであろう。1926年にはフランシスコ・カナロのニューヨーク公演にも参加した。その後ラファエルはパリに戻り、初めはフアン・カナロと共にいくつかのタンゴ楽団を率い、フランス、スペイン、ドイツ、その他のヨーロッパ諸国で活動した。1931年にフアン・カナロがアルゼンチンに帰国したので、その後は自らのオルケスタを率いてパリを中心に1939年まで活動した。そして第２次世界大戦が勃発した1939年にアルゼンチンに戻った。

1930年代にラファエル･カナロは「アンバサドゥール（Ambassadeurs)」、「フロリダ（Florida)」、「レルミタージュ（L'Hermitage)」、「クラリッジ（Claridge)」などのパリの有名な歓楽拠点に出演した。当時、彼のオルケスタにはピアニストとしてフィオラバンティ・ディ・チコ（Fioravanti Di Cico)、バンドネオン奏者兼編曲者としてエクトル・アルトーラ（Héctor Artola）が居た。歌手としてはスペイン人のカルメン・セビリャ（Carmen Sevilla）とルイス・マンダリーノ（Luis Mandarino)、それにアルゼンチン人のアルド・カンポアモール（Aldo Campoamor）が居た。

高橋忠雄氏は1937年４月３日にパリのレストラン「プルニエ」でラファエル・カナロと語る機会を持たれたが、その時、ラファエル・カナロはフィオラバンティ・ディ・チコについて「あの男は私のメンバー中で第１です。あの男の兄さん（＝ミノット・ディ・チコ）が私の兄のフランシスコのオーケストラの中でバンドネオンを弾いております。やはりあんな頭の禿げ方をしていますよ。ハハ」と語ったそうである（参考資料［２］)。フィオラバンティ・ディ・チコの風貌が想像される。上の写真のピアニストがフィオラバンティ・ディ・チコであろうか。

高橋忠雄氏、R. カナロ夫人、R. カナロ

第２次世界大戦終結後、ラファエル・カナロは再びアルゼンチン人とヨーロッパ人のメンバーからなる楽団を編成して全ヨーロッパと中東諸国を巡演した。ディスコグラフィにある1945 ～ 1948年のスペイン録音はこの時のものであろう。その後の彼の動静については諸資料に記述がない。彼は1972年１月28日にマル・デル・プラタで亡くなった。

ラファエル・カナロの演奏スタイル

ラファエル・カナロはヨーロッパ人の嗜好を考慮しつつも、アルゼンチン・タンゴの基本スタイルを保持している。これについては本人の言っていることを引用するのが最善である。ラファエル・カナロは前述の高橋忠雄氏との会談で次のように言っている：

「我々兄弟（＝フランシスコ、ラファエル、フアン）は皆同じシステムです。唯私のが一番派手で、賑やかだとは思いませんか？　これはパリではこの様にしなくては受けないからで、私でもアルゼンチンに帰ればもっと静かにやります。こちらの人は寂しいタンゴが嫌いで、フリオ・デ・カロもパリでは受けませんでした。...」

デ・カロがパリで受けなかったとは意外であるが、同時代の証言であるから信憑性は高いはずである。

ラファエル・カナロの録音活動

ラファエル・カナロのディスコグラフィとしては参考資料［3］のウェブ・サイトに掲載されているものが恐らく唯一ではないかと思われるが、これとても作成者がすべての原盤の実物を当たって作成したものではないから、不備な点は多いと思われる。

（編集部注）この記事には詳細なディスコグラフィが準備されていますが本誌紙数の関係から掲載出来ずTangueando en Japónの次号（第36号）に掲載されます。

作曲家としてのラファエル・カナロ

ラファエル・カナロの作品としては何と言っても“センティミエント・ガウチョ”が挙げられる。しかしこれは実はフランシスコ・カナロの作品でラファエル・カナロは名前を貸しただけであることは良く知られているから、これを彼の作品の第１に数えることには無理がある。その他の作品としては“ピスピレータ（Pizpireta）”、“レハニーア（Lejanía）”、“ラ・バトゥータ（La Batuta）”、“ラ・パルメラ（La Palmera）”、“タンゴ・デ・メディア・ノーチェ（Tango de Media Noche）”、“シエルトス・アモーレス（Ciertos Amores）”があるというが、いずれも有名曲ではなく、自作自演も少ない。

参考資料

［1］Horacio Ferrer, “El Libro del Tango”, Tomo II, Tomo III
［2］高橋忠雄、「ラファエル・カナロと語る　四月三日　レストラン「プルニエ」にて」、ダンスと音楽、1937年６月号
［3］http://www.bibletango.com
［4］Óscar Zucchi, “El Tango, el bandoneón y sus Intérpretes”, Tomo II, CORREGIDOR 2001, pp.492-510

バンドネオンの名前と由来　背景と影響

舳松　伸男（堺市）

アルゼンチン・タンゴに欠かせない楽器バンドネオン。この名前に関する由来は様々の解釈がなされている。タンゴ史の研究家である加年松城至氏の論考、「La historia del Tango」第５巻「El bandoneón en tango」（Óscar de Zucchi 著、1977）、拙著「タンゴ　歴史とバンドネオン」（東邦出版、1991）などにその由来が記されている。

私はこれらに納得できないでいた。1948年、私はこの楽器を手にした。大阪楽器サービスセンター“ユニバーサル”の経営者である安田茂氏は当時アコーディオンの修理・調律をしておられたが、ディアトニック・バンドネオンは初めてで、さぞかし苦労されたことと思っている。安田氏のご子息はドイツに在住されてピアノ調律の第一人者である。1980年11月“ベルリンの壁”が崩壊し東西ドイツが統一され、その後ご子息から安田氏に送られて来たバンドネオンに関する資料を拝見したところ、その中にバンドネオンの命名に関するものがあった。

そこでこの安田氏の資料と上記の拙著を参考にして、バンドネオンの命名のその由来について説明したい。バンドネオンの創始者であるハインリッヒ・バンドやバンド家の人々は演奏家としても有名だった。彼は1843年に“ハインリッヒ・バンド商会”をドイツのクレーフェルド市（デュッセルドルフの近郊）に創業した。彼が作った楽器がバンドネオンと呼ばれるようになったと記録に出て来るのは1850年頃であり、名前の由来についてはドイツの文献に明確に述べられている。

日本語やスペイン語ではバンドネオンと発音するのが普通だが、ドイツ語では“バンドニオン”となる。アルゼンチン・タンゴの歌手でも“バンドニオン”と発音して歌っている人たちもいる。こうした言語の発音の違いによる呼び方の違いが、名前の由来についての諸説を生んだ原因ではないかと思う。ドイツでは名前の後ろに接尾辞“ION”を付けることも流行した。こうするとギリシャ風の響きになるからである。

この楽器は、庶民の娯楽としてのライン地方のカーニバルやドイツ民謡などを演奏する目的で作られた。バンドネオンという言葉は、庶民にとって大変インパクトのある響きで、楽器は教育程度の高い人々だけのものと思われていたのが、自分たちも身近に音楽を楽しめるということになって人気になった。教育程度の低い人たちでも気軽に演奏が可能だということだ。そしてドイ

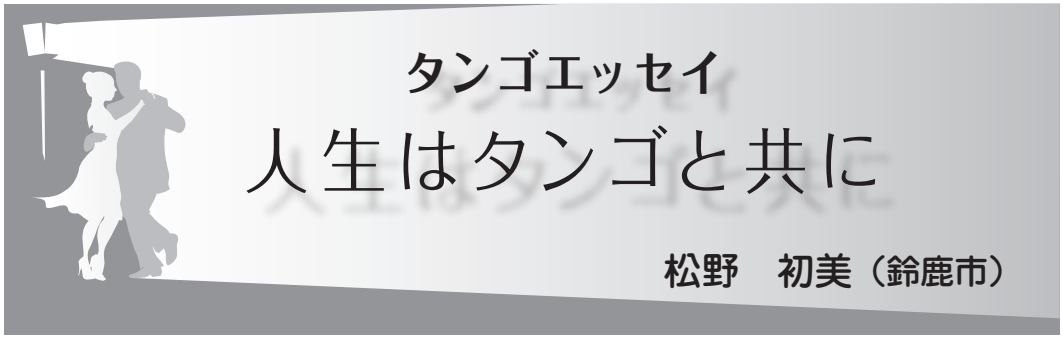
ツの中でもライン地方は昔から劣悪な条件で働く労働者の多い土地であり、彼らにとってバンドネオンは唯一の娯楽であり、そのせいで沢山のバンドネオン倶楽部が存在して居たとのことだ。もともとライン地方で生まれた楽器なのだが、ドイツ全土に拡がり各地で生産されるようになった。

特にザクセン地方（カールスフェルドなど）にはバンド氏が居た。カールスフェルドで作られたバンドネオンがなぜ有名なのかと言えば、このザクセン地方の人たちは非常に輸出の商売に熱心だったからである。1864年にはエルンスト・ルイス・アーノルドのカールスフェルド社（ELA）がバンドネオンの生産を開始した。カールスフェルドのアルフレッド・アーノルド（AA）の創業は1911年。このA. アーノルド社は取扱店ではなく自社の支店をアルゼンチンに持ち、精力的に輸出を行ったとドイツの記録に残っている。この会社の製品の８割はアルゼンチン向けに輸出され、２割をライン地方に出荷していた。アルゼンチンにバンドネオンが伝わったのは1870年頃で、その経緯にはいろいろな説があるが、ドイツのライン地方で劣悪な条件下で働いていた炭鉱夫などが、新天地を求めて移民として南米に渡り、彼らとともに楽器も伝わったのではないかとされている。そして彼らとともに移住した宣教師たちが携帯オルガンとしてバンドネオンを用いたようだ。

ドイツ全土でブームを起こしたこの楽器も、ナチスドイツの台頭によって衰退して行く。その理由は、ライン地方に沢山あったバンドネオン倶楽部はナチスの政策に合わずバンドネオンの製作工場に圧力がかけられたり、倶楽部の解体や楽器の押収などの弾圧が行われた。その結果、ドイツには残された楽器は少なく、当時沢山出版されていた楽譜なども破棄され、残っているものは極く少数のようだ。それに比べアコーディオンは、政治にも使われ兵士の慰問などにも積極的に用いられたためにナチスドイツの圧力から免れて、戦中・戦後も生産は続けられ、現在でも楽器として残っている。ドイツからアルゼンチンに多く輸出されていたバンドネオンは、こうしたナチスの影響下で1930年代には製作中止・輸出禁止となったため、輸出のピークは1920年頃までと思われる。現在アルゼンチンに残っているバンドネオンの殆どは1930年代以前に作られたと言うことだ。

私は、1948年以来、十数台のバンドネオンを入手したが、どの楽器もかなり傷んでいた。蛇腹の破損、ボタンの欠損、調律の不全、パランカ（palanca）の歪みなどが見られた。しかし、前述の安田氏のお陰で殆どを修理して頂いた。レオポルド・フェデリーコ氏のもの、故アルマンド・ポンティエール所有であったものなど相当傷んでいたが安田氏の手で殆どが原型に復した。部品は私がブエノスアイレスで手に入れて来た。

これ程までにこの楽器を演奏していた当時のドイツの庶民階級の人々には、この楽器の発展や後世に与えた影響などは想像すら出来なかったことだろう。今にして想えば非常に残念である。



タンゴエッセイ

人生はタンゴと共に

松野　初美（鈴鹿市）

“思い出のエピソード”

最前列中央の座席に座っていた私共夫婦の目の前では、大変な親日家で知られたドナート・ラシアッティとその楽団メンバーが、Bn.2, Vn.1, Pf, 1 の四重奏＆唄、女性歌手１名の編成で、終始ニコニコと演奏していた。

ラシアッティの「エル・オリエンタル」の軽快なリズムに始まり、「エル・チョクロ」「エル・ウラカン」と続いたが、明快な歯切れの良いリズムに酔いしれる。それは1997年12月４日の昼下がりの事、タンゴの先輩からの情報で駆け付けた静かな山間にある特別養護老人ホームでのコンサートだった。30人程で一杯の小さなホールでしたが、外部からの訪問者は私達夫婦のみで施設からは大変な歓迎を受けたものです。一時間程の演奏後、その時の司会者タンギート・木田様のご配慮により控室に招かれたのです。目の前にはマエストロ　D. ラシアッティ、挨拶とともに握手を交わしたもののサインをお願いする色紙もペンも持ち合わせていなくて、とっさの思いつきでしたが着ていた洋服の胸にお願いしたのです。すぐさまニコニコと快くサインに応じてくれてとても感激したのを覚えています。こんなサインを申し出た私にラシアッティさんもさぞびっくりされた事でしょう。今は古くなり着ることは無いのですが、私の宝物の一つとして残しています。（写真右）

今は亡きマエストロD. ラシアッティさん、あの時の笑顔は一生忘れられなくそれは特別印象の深い出来事として私の胸に刻まれたのです。

“私のタンゴとの遭遇”

さて、私がタンゴに遭遇したのは中学生の頃よりラジオの短波放送で流れてきたタンゴに魅せられたと言う夫との出会いからでした。彼の好みはカナロ、フィルポ、ビアジ、ダリエンソといったレコードが主流で、SP、EP、LPと数多くのコレクションが有り、タンゴに囲まれた生活が始まったのです。そして長い年月の間には四日市にもタンゴの同好会が発足して所属するうちに、タン

ゴの良き仲間たちとの交流が私を一層タンゴへと過熱させて行ったものでした。そんな中でもセンティミエントが心を打つC. ディ・サルリへと好みが傾いて行ったものでしたが、時にはH. バレラの様な豪快な演奏も好み、今では現代タンゴも聴いてみる幅広いタンゴに接しているけれど、何と言ってもやはり黄金時代のタンゴに回帰してしまいます。最近はまた昭和回顧でSPやLPのレコードに人気が出ているようですが、またゆっくりと針の音でも聴きながら楽しみたいと思っているところです。ヨーロッパ楽団の映画音楽に没頭していた若い頃は想像もしなかった現在のタンゴへの執着は、まるで嘘の様で人生って本当に不思議な気がしてなりません。

“中部リンコンでの思い出と秘話”

2012年11月11日中部リンコンが四日市で有りました。実行委員会の会長さんから「欧州タンゴのドイツ編」をやってみないかとプログラム担当の大役を任せられて、「ドイツタンゴ８曲選」を解説することになったのです。

私がドイツタンゴに興味を持ったのが、「バルナバス・フォン・ゲッツィ」で、48曲入りのCD秘蔵盤を聴いたことから始まります。以前に買い求めていたのですが余り聴かなくて、同好会での「欧州タンゴ」に刺激を受けた事で新たに聴くバルナバス・フォン・ゲッツィ、それは戦前の日本でもこの楽団がブームになったと言われる所以が納得できる哀愁極まりない素晴らしさに私はすっかり気に入ってしまったのです。そんな切っ掛けから惹かれて行った欧州タンゴでした。

リンコンは２回目の担当となりました。当日は生憎の雨、駐車場から傘をさして会場に向かう途中、商店街のアーケードに入るや傘をたたむ時に「お気に入りの指輪」をポロリと落としてしまいました。それはいぶし銀とオニキスで加工された小花のデザインでしたが探しても何処へやら…気持ちは暗くなりながらも会場へと急ぎました。既に沢山の方達が遠方からもいらしてて、すぐくつろぎの場に溶け込んだものです。雨にも関わらず50 ～ 60人位来場されていての大盛況ぶり。トップランナーを務めさせていただきました。

“ドイツタンゴ”

第一次大戦後の（有名な画家たちの集う）「エコール・ド・パリ」に湧く1920年代初頭、アルゼンチンの音楽家達「マヌエル・ピサロ」や「ターノ・ヘナロ」を初め多くの演奏家達が、パリを中心に娯楽場での演奏と巡業に参加するため次々とヨーロッパを訪問し、フランスやドイツにも「タンゴ」の魅力を植え付けましたが、それを決定づけたのが周知の通りのF. カナロとその一族のパリ公演でした。

アルゼンチン組がヨーロッパタンゴに大きく貢献していた頃、ドイツでもジプシー系の音楽を得意とする楽団が輩出され、その中でもサロンオーケストラとしてドイツで大変な人気だったバイオリンの２大ビルトゥオーソ（名手）の率いる「バルナバス・フォン・ゲッツィ楽団」と「マレク・ウエーバー楽団」がありました。他にも「ダヨス・ベラ」「ロベルト・ガーデン」「アダルベルト・ルッター」「オスカー・ヨースト」「ハインツ・フッパーツ」等のドイツを代表する楽団が生まれたのです。

プログラムにはこの２大楽団を初め、上記の楽団を取り上げましたが、全てバイオリンの名手がマエストロの楽団でした。バイオリンの歴史は古く1600年～ 1700年にかけて、イタリアの北

部「クレモナ」という処で作られていますが、そのバイオリンの音色にもそれぞれの特徴が有り、２大名器と言われるストラディバリウスは高音部に美しく繊細な音域、ガルネリは低音で重厚な音域と言う違い、フォン・ゲッツィは「ストラディバリウス」、マレク・ウエーバーは「ガルネリ」を使っていたとの事で、演奏を聴くとはっきりと違いが分かる面白い発見が有りました。

また、上記の「アダルベルト・ルッター」は南米航路の船上楽団員でしたので、ドイツ生まれのバンドネオニスタを入れていて（フレッド・デンプケ、ワルテル・ペルシュマン）、そのアルゼンチン色の濃い演奏は、ドイツタンゴとは思えない迫力が有り、「ラ・クンパルシータ」他アルゼンチンタンゴも録音を残していたし、他の上記の楽団もそれぞれに特徴が有り、優美な演奏はドイツタンゴの魅力を最大限に発揮していると思います。

ですから、この様な独自の旋律を持ちバイオリンの流麗さを主にしての甘美に満ちたノスタルジックな雰囲気は、アルゼンチン・タンゴとは異質の良さが有りました。このようなドイツタンゴを会場の皆さんに聴いて貰ったのでした。

処で、解説も８曲と共に無事終了したのですが、予期せぬ質問も有り私は戸惑いながらも笑いのこぼれる和やかな雰囲気、“良かったよ～”にホッとした瞬間でした。

今はこれまでのサポート頂いた沢山の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

“最近のテレビから”

テレビの「旅番組」をよく見ますが、現在でもパリでは「Tango」と言うダンスホールが有り、入口から通路にかけた側面にはタンゴ・ダンサーのポスターが貼りめぐらされたレトロな雰囲気、きっと30年代頃から有ったのではと思いますが、「ケハス・デ・バンドネオン」をバックに熟年男女が華麗にダンスをしていて、若い時から通っている！と楽しそうだったり、また、イタリアの（ロミオとジュリエットで有名な）ベローナでは夕闇せまる頃、何処からともなく着飾った老若男女が広場に集まってきて「ディ・サルリのバイア・ブランカ」をバックにタンゴを踊っている風景、それは大変感動的でした。まだまだタンゴはヨーロッパでも盛んに息づいていると…そしてこんな楽しい人生って素敵だな～と思ったのです。

私はダンスは踊れませんが、私にとってタンゴはウィルスに侵された熱病のようなもの、嬉しい時悲しい時タンゴを聴きながら過ごす日々、そして我が人生の最終章ではC. ディ・サルリの「エンスエーニョ」で飾りたいと思っている程で、“TANGO”それは正しく私の「人生タンゴと共に」と言ったところでしょうか。

今有る私をこれまで支えて頂いた多くのタンゴの先輩方に感謝しつつ・・・¡VIVA TANGO! と・・・伝えたくて。

最後に・・・ＮＴＡ会員になって（2008年から）７年になりますが、パソコンで描く「イラスト」は過去２回掲載して頂きましたが、投稿文は初めての事で何を書いたら良いのかと迷いながらの記事となり稚拙な文章となりましたが、今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

曲が先か・・ ストーリーが先か・・・!

寺本　千栄子（千葉県市川市）

去年の８月頃のことアカデミーの弓田様からお電話を頂いた。

何かと思えば“来年のタンゴランディアに何でも良いから書いて欲しいの”との内容だった。“２月までで良いからね～”って電話は切れた・・それからすぐに今度は編集長の大澤様から依頼のメールが届いた。

もう逃げられない・・・だけど、書くことが何も浮かばない・・・！

思えば去年アカデミーに入る時“私、何にもタンゴのこと判って無いしアカデミーに入るなんてとても無理です・・”と訴えましたのに、副会長の齋藤様が“入ってから勉強すれば良いよ。その方が覚えるのはずっと早いよ！”ってとても丁寧に説明して下さり、あの優しいお顔でにっこりスマイルされたものだから、思わず“はいっ”って返事してしまった私。

その後送られてきた機関誌などを読ませて頂く程に、タンゴを知り尽くされた会員の皆さまのタンゴへの熱い思いが詰まった文章ばかりで・・・冷や汗がタラタラ～・・・

“タンゴは好きなれど、好きと理解度は別物なのよね～！”往生際悪く嘯いてはみたもののなんとかせねば・・“今更書けません・・”とは言えないし、と、ひねくり出した結論が、難しい事は所詮書けないのだから、最近自分で嵌っている”タンゴストーリー”を作った経緯ぐらいならばなんとか書けるかもしれない！　と、ようやく決心がついた。

少し前の事、タンゴの大先輩が“こんな本があるけど見てみる？”って、どこの何方とも解らない方が書かれたという、それこそ“タンゴストーリー”と名づけられた本を貸して下さった。その本には“ひとつの曲”に対してイメージされた物語がとってもハイレベルな美しい文章に纏めてあった。“タンゴの１曲からこんな物語をイメージ出来るなんて凄い方だな！”と、私の頭の中にその本の事が印象深く残っていたのだろうと思う。

ちょうど同じ頃、ノチェーロ・ソイの神楽坂のミロンガで使う曲を50曲選曲した。そのＣＤの中に

・コケータ（魅力的な女）　オルケスタ・ティピカ・ビクトル（1929年）
・ラ・ウルティマ・シータ（最後の逢引き）　フリオ・デ・カロ（1928年）
・ミラグローサ・ビルヘンシータ（奇跡を起こす聖母様）　ルイス・ペトルチェーリ（1929年）
・チュサーソス（尖ったナイフ）　オルケスタ・ティピカ・ビクトル（1927年）

・マタラ（彼女を殺せ）　ファン・マグリオ“パチョ”（1930年）

・アル・イポドロモ・チョヘル（運転手さん競馬場へ行ってくれ）オスバルド・フレセド（1928年）

等の曲を使っていた。

じっと見ているとなんともこれってタンゴっぽい邦題ばかり！！　これらの曲を入れて繋げたら、なんだか短編のタンゴストーリーが出来るかも！　と、わたしの軽い頭が反応してしまった。

先ずは主人公を決めよう。主人公は休みの日になると競馬場に行って、日々の日常をほんの一瞬だけ忘れたい・・と思っている男にしよう・・だけど、競馬場で思いがけず美しい女性と出会い、逢引きの末に、別れを告げられた男が尖ったナイフで女性を刺し殺すのだ・・ストーリーはどんどん繋がり始めた。ところが、これだけじゃ何とも生々しくて物語として美しくない！　そこで、この一連の出来事を男の夢だったことにしようと考えた。悪夢？　から覚めた男は、心の片隅にあったかも知れない男としての自分の欲望に少し後悔を抱きながら、家族への愛情を再認識し平穏な日常の生活が待っている家路につく。そういうくだりを加えよう！　曲もそれに合わせて、美しく穏やかなアイン・リート・オーネ・ボルテ（夕暮れ）バルナバス・フォン・ゲッツィ（1935年頃）の曲を新たに追加で１曲入れることにした。

こうして私なりの名曲によるタンゴストーリー“あの運命的な出逢いさえなければ・・・”が完成した。丁度、すいよう会の黒木会長がお声をかけて下さっていた、この１作目はすいよう会のレココンでお話させて頂きました。ところがなんとその時、私の思い違いで曲名と曲を違える未熟な失敗をしてしまった！　すぐに、間違って記憶していた曲と曲名を一致させて訂正し、ストーリーはそのまま使っても問題は無かったので、自分なりに納得のいく形で完成させたのだけれど、どうしてもこの失敗にモヤモヤした不満の心が残った。

（カット：筆者）

そこで スッキリするためにも“もう１回タンゴストーリーを作ろう！・・”と決心し２作目に挑戦することにした。２作目は１作目の未熟な失敗で自分に不満を抱いた上での再挑戦であった。１作目を考えた時には、既にそこに私の心を刺激する曲が６曲有り、その曲にストーリーを被せていけば良かった。だけど２作目を作ろうと思った時は、１作目と違って曲が既に決まっているわけではなく、取っ掛かりが何にもない状態であった。そうするとストーリーを予め考えるか、曲を数曲選ぶかしないと先に進まないことに気がついた。

曲が先か、ストーリーが先か、この違いが後になって未熟な私にはとても大きくのしかかってくる事になったのだが！　その時点では単純に２作目はストーリーを先に考えようと思ってしまった。ストーリーがなんとか出来て、さあ曲を入れようとした私。この時、今回使おうと思って決めていた曲は“愛の住み家”と“あるジレンマ”の２曲だけ。あとの４曲はぜんぜん決めてなくてこれから捜さなければならなかった。“さあ、いよいよ曲だ・・・”と、１曲目のここに入れるにはこんなイメージの曲がいいなあ・・と思ったのに・・どうしましょう！　曲が全く思い浮かばない！・・タンゴを意識して聴き始めてから今

まで４年余り、私が聴いてきた曲は私の頭の中のどこに消えちゃったのでしょう？　曲も曲名も全く思いつけない現実に・・呆然！！　そして思った・・・私が今まで聴いてきた曲の数などタンゴの曲の全体から見ればほんの僅かでしかない！　それなのに、２作目はストーリーから作ろうなどと簡単に考えた私に、タンゴの厚い壁が立ちはだかったのだ。

“そんなに甘いものじゃないよ！　もっとタンゴを深く知って、もっと沢山聴くのだね！　タンゴは奥が深いのだ！！”タンゴの神様がそう言っているように思った。“だけど、だけれど、タンゴの神様！！　せっかくストーリーまで考えたのだから、どんなことしてもこの２作目は完成させたいのよね！　教えて神様！　どうしたら曲を見つけられるでしょうか？　お願いだからおしえてヨ！”私の必死のお願いが通じたのか？　思いついたのが「タンゴ名曲辞典」（石川浩司編・中南米音楽刊）。本の最後に記載されている“索引”の邦題部分の存在。そこからヒントを頂いちゃえ！

例えば、ストーリーの最初の１曲目に“愛撫”という言葉で連想出来る曲が欲しかった。そこで前記の名曲辞典の索引で“愛撫”を探す・・“あった！”でも、どんな曲だろう？　どんな曲か聴かなければ使えない。そこで“愛撫”の曲を聴きたい！　と我が師に頼んだところ“タンゴストーリーで使うの？”と、我が師はすぐに４パターンの愛撫をダビングして渡して下さった。“なかなか良い曲だ､これは使える！”４パターンの“愛撫”の中で､ストーリーの雰囲気から“愛撫”の曲はロムートで決まり！　という具合で、再た名曲辞典を見る・・・試行錯誤。こうして６曲が全て決まった時は心から嬉しかった。

・カリシアス（愛撫）	**フランシスコ・ロムート（1937年）**
・ニド・デ・アモール（愛の住み家）	**ミノット・ディ・チコ（1931年）**
・ミ・ノーチエ・トリステ（我が悲しみの夜）	**トリオ・シリアコ・オルティス（1936年）**
・トルメンタ（嵐）	**カルロス・ディ・サルリ（1954年）**
・ウン・ディレマ（あるジレンマ）	**フリオ・デ・カロ（1942年）**
・レランパゴ・デ・グローリア（歓喜の稲妻）	**フランシスコ・カナロ（1934年）**

こうして２作目のタンゴストーリーはかなりの曲を聴き、時間を費やして６曲を選び、こうして選んだ曲の繋がりを考えながらストーリーも最初から少しずつ修正して行くという過程を踏んでやっとの思いで完成。

“彼女が僕に教えてくれたこと　それは・・・”と、タイトルをつけた。

２作のタンゴストーリーを作ってみて「曲が先か､､ストーリーが先か､､」私にはそれが大きな問題だった！　タンゴに未熟であった故に、私には「曲が先」の方がはるかに作り易かったのだ！　しかし、タンゴを学ぶ上では「ストーリーが先」の方が勉強になった事が多く満足感はとても大きかった。

こうして完成した２作目を東京リンコンでお話させて頂いたあとに、大先輩のお一人から嬉しいお言葉をかけてもらった。

“良かったよ～！　今度又、タンゴストーリーやる時は、語りの所で僕がうしろでギター奏いてあげるよ”３作目が出来たら、ぜひ一緒にお願いしま～す！！

次は、曲が先？　ストーリーが先？　それが問題なんだけど！

『白夜のタンゴ』が語るもの

櫻井 征夫（埼玉県三芳町）

昨年の11月『白夜のタンゴ』を観た。ドイツ人のドキュメンタリー映画監督として注目されているヴィヴィアン・ブルーメンシェインの手に依るドキュメンタリー風な作品でドイツ・フィンランド・アルゼンチン三国の合作映画である。以下その粗筋。

［導入］：“La　Cumparsita”をBGMとしてフィンランドの映画監督で国際的に評価が高いアキ・カウリスマキがやや真剣な面持ちで“タンゴについてアルゼンチン人は誤解をしている”と語り出す。その要旨は、

●タンゴの起源はフィンランド東部（註：現在はロシア領になっているカレリア地方）で、そこの農牧従事者が家畜を守る為に古来歌っていたもの。

●1850年代に集会場でダンスが踊られ始め、1880年代には西部に伝わり、そこから船乗りによってアルゼンチンに伝わったもの。順序からすれば先ずウルグアイ次いでアルゼンチン。この点も誤解されている。だからフィンランド人は自分達のタンゴにもっと誇りを持って良いんだ。

［場面はブエノスアイレス］：昼夜忙しく活気に溢れた大都会。そこのタンゴ界で活躍中のW. チーノ・ラボルデ（歌）D. ディピ・クイッコ（ギター）パブロ・グレコ（バンドネオン）の３人がこの話を聞きつけ、タンゴは我々の魂と声を挙げ、街の人々も自分たちの物として譲らない。３人は夫々タンゴとの関わりと思いを語る。そして事の真偽を確かめようとフィンランド行きを決める。

［舞台はフィンランド］：広がる青空。車を走らせても何処迄も続く森と数々の湖、草地にはトナカイの姿も。街らしきところはなかなか見えず３人の口から出るのは愚痴ばかり。やっと着いた村の集会場で３人は演奏を披露し大いに受ける。翌日夫々の感想を話あう。

パブロ：結構な人出で老いも若きも皆楽しんでいたな。
チーノ：踊りのステップにオーチョ（８の字を描く脚の運び）が無かった。
ディピ：来ていたのは年輩者ばかりだった。

――旅の目的の為色々な専門家に会い話を聞く事としていた

カリ・リンドクヴィスト（アコーデオン奏者）：パブロとの掛け合いで“El Choclo”を見事に弾く。カリは、身体全体を使って弾くパブロのスタイルが大好きだ、と褒める。自分たちのやり方は突っ立って弾くスタイルなんだ、と。カリにタンゴの発祥地の件を質問すると、一瞬口ごもり唯ニコニコ笑って返事が来ない。

サンナ・ビエテイアイネン（音楽教師）宅に立ち寄る：彼女は張りのある美しい声でフィンラ

ンドタンゴを披露する。聞き惚れたチーノは彼女から発声の手ほどきをうけ、更に二重唱、フィンランド語で‘La Cumparsita’を歌う。

――旅の途中サウナも経験し“息苦しくなるようだ”等と愚痴が出るが悪い気分ではないらしい。３人はフィンランド人のゆったりしてどことなく愛嬌のある人柄は、広々とした大自然に因るものだろう等と話し合う。３人の気持ちから“起源”の問題が徐々に薄れて行くようだ――

M.A.ヌンミネン（音楽家、エンターテイナー。前衛的な芸術家）に会う：彼は語る。“フィンランドタンゴはロシア民謡に、ダンスのステップはドイツの軍隊の行進の形から影響を受けた単純な物だ。でもタンゴダンスはセクシーだし、口下手なフィンランドの男は女性に気軽く話しかける事ができない。そこで重要なのがタンゴの歌だ。歌詞に気持ちを託しているのだ。”

――ヘルシンキ芸術大学教授Y.レバントは数年前或る刊行物で“人を繋ぐ静けさ”と題して、昔からサウナと教会では静かにせよ、と言われて来たが一つ付け加えるとすれば“Tango floor では”と言える、と述べている――

リク・ニエミ（タンゴ研究家、指揮者）とも会う：ディピはタンゴの起源がフィンランド東部との説をどう思うか尋ねる。リクはアルゼンチンタンゴがどの様に生まれたか判っているのか？と聞き返す。ディピの答えは“No”。リクは続ける。“その様に良くわからない事は世の中には多いのだよ。”

――最後迄この問題に固執していたディピだが、何とか合点がいった様だ。３人は残る重要人物に会いに行く。途中道に迷い一服の間にディピのギターでチーノが歌う。“Volver”――

レイヨ・タイパレ（フィンランドタンゴ界で最大の人気を得て、国民的歌手と評価される）：図らずもフィンランドのタンゴブームに火をつけた形で活躍した1960年代の様子を語る。再生されているビデオには名曲“SATUMAA”を歌う若き日の姿と、ダンスに興ずる若者達の姿がある。一緒に見ている３人からはタンゴの起源云々の話題はない。やがてレイヨと３人は湖の畔で肩を並べ、夏至の日でなかなか沈まない太陽に向かって立つと“Satumaa”を歌うレイヨの歌声が聞こえ出す、、、、

広い大海の彼方には、幸せの波が打ち寄せ、何時も花が咲いて
明日の憂いも忘れさせてくれるお伽の様な国が有ると言う
（中略）
私がそこにたどり着けるのは、頭に思い描く事でだけなのだ

帰国する日が近づいた。３人は旅の目的は一応達せたと考える。それは“夫々の国や民族には夫々の歌や曲があって良いのだ”３人はグラスを掲げた。“キッピス！”（乾杯！）―　幕　―

“La Cumparsita”で始まり“Satumaa”で終る、その間両国のタンゴ曲を相当数挿入するなど、監督のきめ細かいシャレた配慮に好感が持てる。又、フィンランドの広大な森や湖等、穏やかな自然の風景を見事に映しだした。更に、陽気で積極的なアルゼンチン人と静かで控えめなフィンランド人、夫々の気質をうまく引き出して観る者を飽きさせない。

20年程前フィンランド人は自分たちを“shy”な国民だと言っていた。1995年フィンランドがEUに加盟した年、加盟諸国の国民の特徴を描いた風刺漫画が出回った。フィンランド人につい

ては、口に絆創膏をX字に貼った男の顔だった。彼らの“shy”はヨーロッパ社会では公認の事だったようだ。そして若い世代の人々からは、フィンランド人のアイデンティティは何かと言った話題がよく口にされていた。

映画では人々が立派なログハウスで踊っているのが紹介されていたが、地方の町では日本のあずまやを少し大きくした位の簡素な建物に床を木で敷いた程度の所もあり、楽団ではなくレコードのフィンランドタンゴで踊っていた。彼らのタンゴ好きは全国的（アルゼンチンでボルテーニャ音楽として確立しているのと対照的）に広がったものだった。そして私の記憶には、フィンランドタンゴは、哀愁のある穏やかなメロディで歌われているもの、として刻み込まれた。この映画で、口下手な彼らが愛を伝えるのにタンゴに託していた等、如何に苦労をしていたのか思い知らされた。だがフィンランドタンゴは国内で人気があるだけで世界的には殆ど知られていない。例外は“Satumaa”。

ウント・モノネンが作詞、作曲し1955年（25歳の時）に発表され、レイヨ・タイパレが1962年（22歳）に初めてレコーディングしたものが空前のヒットとなった作品だ。

３年間滞在したもののフィンランド語が殆ど判らない私には、Satumaaの意味すら判らずにいたが、この映画を観てようやく大意が掴めたのはよかった。（前掲した歌詞は、アメリカのロックバンドFrank　Zappaのグループが1974年ヘルシンキ公演時に英訳した＝出典wikipedia＝ものの概要）。第２次世界大戦の終了時、東部カレリア地方をソ連に割譲せざるを得なかったフィンランド、その地方で生まれたモノネンの心情が組み込まれたこの作品が大衆の心を掴んだのだろう。この曲を、深刻にならず力強く且つ明るく歌い上げているレイヨの歌声を、今年１月の東京

夏至の夜、セウラサーリ公園の大焚き火。ボートからの眺め。

リンコンで鈴木茂次さんが紹介された。尚、女性教師サンナが歌ったフィンランドタンゴは通常作者不詳とされているが、彼女は“ヌンミネンに因ればこれもモノネン氏の作品”と紹介している。

最終部、レイヨがタンゴ全盛期頃の様子を語っている時、多くの若い男女が踊っている場面が映し出されていたのは印象的だ。即ち、フィンランドでの初演後ディピが図らずも口にした“来ていたのは年輩者ばかり”との感想は、私も駐在した当時既に感じた事だ。

90年代初め頃ノキア製のケータイを手にした若者達は“おしゃべりになった”と言われる様になりロックやポップス等新しい風潮に適応する者も増えつつあった。アキ・カウリスマキはフィンランドタンゴを愛して、彼の作品にも良く使っている。アキからすればタンゴはアイデンティティの一部と考えているのかもしれない。だから起源の問題も絡めフィンランド人にもっとタンゴを愛せよと投げかけたのではないか？と考えたくなる。

映画の題名『白夜のタンゴ』は日本人にはイメージ的に親しみ易く受け入れ易い、良い命名だ。だが、原題は『夏至（mid-summer）の夜にタンゴを』とも読み取れる。白夜のシーズンの中でも夏至の日は北欧では古来特別な日だ。この日を境に日照時間が徐々に短くなり、長く暗い冬に向かう季節の移り変わる日。だからこの日を祭る風習が有る。フィンランドでは“焚き火”（bon - fire）を燃やす仕来りがあり、ヘルシンキでは市内の大きな公園を囲む入り海の岩礁に、古いボートを数隻舳先を天に向け２段に積上げた巨大な櫓が組まれる。やや日が陰ったほどに感ずる夜９時に火が付けられると、見物の観衆は一斉に話を止め、辺りは静寂に包まれる。人々は夫々の思いを心に抱いて燃え上がる焚き火を見つめている。焚き火が終わる10時からダンスが始まり午前１時迄続く。

『夏至の夜にタンゴを』は、監督の意図は計れないが”起源などに固執せず、新たな気持ちでタンゴを楽しもう”、と語りかけている様に感じた。―　完　―

（編集部注）

“夏至の日の焚き火”など数多くのカラー写真が提供されたが、遺憾ながら本誌はカラーで掲載出来ず、これらの写真は去る３月３日の東京リンコン会場で回覧されました。

ブエノス・アイレスの夜 聴いて、踊って

佐藤　進（埼玉県上尾市）

2014年11月に家内と共にブエノス・アイレスを訪れた。今回は踊ることを主目的としたので、17日間の滞在中にライブハウス２回、ミロンガ14回を楽しむことができた。以下にライブハウスとミロンガで聴いた演奏について、若干のミロンガ風景を加えて述べる。

▲ライブハウスで聴く

ブエノス・アイレスでも定期的にタンゴの生演奏を聴かせる店は少ない。「トルクアット・タッソ」、「カフェ・ビニーロ」、「アルマグロ・タンゴ・クラブ」さらに強いてあげるとすれば観光客向けではあるが「カフェ・トルトーニ付随の小ホール」くらいと思われる。これらの店でもタンゴの演奏は毎日あるわけでなく週１から３回くらいである。ライブハウスでの楽しみは飲み物を飲みながら演奏をすぐ近くでじっくりと聴け、演奏終了後は出演者と身近に触れ合う機会があることである。

１．出演者：セステート・マジョール

出演場所：アルマグロ・タンゴ・クラブ、アルマグロ

セステート・マジョールはホセ・リベルテーラが亡くなり、ルイス・スタッソが引退した後は、バンドネオン奏者のワルテル・リオスが引き継ぎ、その後はオラシオ・ロモがマエストロとして演奏活動を行っている。そのセステート・マジョールがアルマグロ・タンゴ・クラブに出演するというので聴きに行った。アルマグロ・タンゴ・クラブでは2014年来日したグレコ兄弟が中心になって、毎週末の金と土曜日にタンゴの演奏家を招いてコンサートを行っている。100人位入ればいっぱいになるホールの正面にステージがあり、反対側にはバー・コーナーがある。案内された席はホール中央の位置、テーブルについて飲み物を注文し周りを観察する。斜め後ろの方からやや大声での談笑が聞こえてくるので振り返ると、見覚えのある顔が数人見える。失礼であるがさらに振り返ってよく見ると、オラシオ・ロモをはじめとするこの夜の出演者達である。会釈をしたらにっこりと会釈で返してくれた。小さなライブハウスやミロンガでは出演者用の席が、ホールの一角などにテーブルを置いて設けられていることが多い。客は20代から30代と見受けられる人が大半である。この人達は入場料を払わずに団体席と思しきテーブルに着席したところから、ここの会員でもあるかと推察される。その他の客は年齢は多々で、ほとんど地元の人達である。

演奏は午後10：20に始まった。スタート曲はややモダンなインスト曲であるが、曲名がわからない。ライブハウスやミロンガでは通常プログラムはなく、曲の演奏前か演奏後に司会者ないしマエストロから曲名が紹介される。外国人には聴き取りが難しく、曲名がわからないことが多い。

１曲目の演奏が終わるとやんやの喝采である。２曲目は「ワルツ曲」だがこれも曲名わからない。続いて「Lluvia De Estrellas」、「ワルツ曲」、「El Día Que Me Quieras」、ホセ・リベルテーラを偲んで「Universo」、「Oblivión」と演奏される。セステートの構成員はフルビオ・ヒラウド＝ピアノ、エドゥアルド・ワルサック＝バイオリン、若手のバイオリン奏者（名前は未確認）、オラシオ・ロモ＝バンドネオンと指揮、ルシアーノ・シアレッタ＝バンドネオン、エンリケ・ゲラ＝コントラバスである。最近まで出演していたバイオリンのマリオ・アブラモビッチは休みで、代わって若手のバイオリニストが第一バイオリンを弾いている。司会のホラシオ・ロモはアブラモビッチは体調を崩して休んでいると言っていたが、その時は気にも留めずにいた。それから16日後の12月１日にアブラモビッチは帰らぬ人となった。残念である。アブラモビッチの代わりを務めていたバイオリニストは十分に代役を果たし、随所に素晴らしい演奏を聴かせてくれた。アブラモビッチと共にこのセステートのバイオリンを支えてきたワルサックは、派手さはないが柔らかい温かみのある音色で客を魅了し、彼のソロ・プレーの度に声援が送られていた。ワルサックを除いては若手と中堅で構成されるこのセステートの演奏は、全体的に明快なアレンジにより聴きやすい。どのプレーヤーも余裕のプレーで、観客との距離は短くお互いの呼吸を図りながら演奏している感じがし、若干のインプロも交えて演奏を楽しんでいる。各プレーヤーの力強い迫力あるプレーには圧倒される。小さい場所でのライブの醍醐味といえる。オラシオ・ロモはトークの時に来場している客の名前を呼んだり、アブラモビッチの娘さんを紹介したり、たまたま遊びに来ていたベーシストのダニエル・ファラスカを紹介したり、客席とのコミュニケーションを上手にとり、会場の雰囲気を盛り上げながら客とプレーヤーとの一体的なライブを作っている。さらに演奏は続き、最後はピアノ・ソロで始まる「Lo Que Vendrá」そして華麗な演奏の「Canaro En París」で午後11:30に終了した。この夜の演奏でフルビオ･ヒラウドのピアノが光っていたし、若手バイオリニストの随所に見せた華麗なバイオリン演奏は客を魅了し、特に「Oblivión」でのソロ・プレーは印象に残った。

ステージ終了後出演者テーブルで談笑中のオラシオ･ロモに声をかけ写真撮影をお願いしたり、会場で知り合ったタンゴ好きと談笑したりしているうちに、午前零時を過ぎた頃にタンゲリーアの仕事を終えたラウタロ・グレコが現われ、知人に挨拶をしながら我々のテーブルにも寄り、2014年の訪日ツアーの話をした。和やかな雰囲気の中で時間の経過は速くもう少し残りたい気はしたが、次の予定もあり午前０：30会場を後にした。

２．出演者：リディア・ボルダ

出演場所：トルクアット・タッソ、サン・テルモ

私の好きな女性歌手であり、かねてより生の歌を聴きたいと願っていた。滞在期間中にリディア・ボルダがトルクアット・タッソに出演することを知った時から、ブエノス・アイレス訪問の一番の楽しみとなった。当夜はリディア・ボルダがイタリアのシンガー・ソングライターであるフランカ・マスを迎えてのライブである。一部ではフランカ・マスのボサノバ、カンツォーネ、タンゴなどを聴く。二部にリディア・ボルダが登場する。イメージしていたよりもふっくらとした感じがするが、堂々としていてさすが現在のタンゴ界の大物女性歌手といったところである。歌は「No Te Apures Carablanca」で始まる。なじみの薄い曲であるが、ローカルの人達には好まれる曲らしく、歌い終えた途端やんやの喝采である。伸びのある声でしっとりと歌い上げた

後は、２曲目「Alma Tanguera」を歌う。聴きながら歌に吸い込まれていくような感じがする。この曲の伴奏ではピアノが光っていた。３曲目からは「Chacarera De Las Piedras」をはじめにフォルクローレを４曲続けて歌う。歌い終えた後水を飲む。この後も頻繁に水を飲む姿が目についた。水を飲み終えるとステージの中央に腰高の椅子を持ち出し、椅子に腰を下ろして軽口のトークに移る。リディア・ボルダのトークは適当な冗談を交えながら曲を紹介してゆくが、会場の雰囲気を和やかに変えてゆく。この後もフォルクローレの歌が続く。2014年にアルバム「Lidia Borda Atahualpa/Canciones De Atahualpa Yupanqui」をリリースしたが、アルバムのタイトルどおりアタウアルパ・ユパンキの曲の最新録音集であり、この夜のライブは新アルバムの発表記念の感がした。再びフランカ・マスが登場しリディア・ボルダと二人で「Alfonsina Y El Mar」と「Naranjo En Flor」を歌う。タンゴは３曲のみであったのが少々寂しかった。リディア・ボルダの伴奏はピアノ、ギター、チェロ、コントラバスから成る四重奏団であるが、演奏が前に出ることもなく、歌に寄り添うように進んでゆく。最後は再びリディア・ボルダのみで「Guitarra Dímelo Tú」を歌ったが、この歌の印象が強くこの文を書きながらもステージの光景が思い浮かぶ。盛大なアンコールの拍手に応えユパンキ作のチャカレーラ「Dejame Que Me Vaya」でライブは終了した。ステージ終了後リディア・ボルダとフランカ・マスは客席のテーブルの間を縫って知人などと挨拶を交わしたり、談笑したりしている。歌手と身近に触れ合える瞬間であり、小さなライブハウスの良さであろう。私も二人の歌手に挨拶をして会場を後にした。

▲ミロンガで聴く、踊る

ブエノス・アイレスのミロンガは一般にＣＤを音源として使用している。但し、音の出し方としてはほとんどのミロンガのＤＪ（音響および選曲担当者）が、あらかじめパソコンに音源を取り込んでおき、実際のミロンガではパソコンからの選曲を行っている。ＣＤによるよりも選曲の自由度が格段に高い。選曲しておいた順番に曲を流すこともできるし、実際フロアーの反応を見ながら素早く選曲をしている。ＣＤ音源に加えいくつかのミロンガでは定期的にタンゴの楽団を招いて生演奏が行われている。滞在期間中にミロンガでは３楽団の生演奏を聴く機会を得たが、ここでは上手なダンス・ファンの多く集まる、パレルモ地区にあるサロン・カニングで行われるパラクルトゥラルというミロンガ出演の「ラ・フアン・ダリエンソ楽団」について述べる。

３．出演者：ラ・フアン・ダリエンソ楽団

出演場所：パラクルトゥラル/サロン・カニング、パレルモ

あらかじめ電話で予約していたので、待たされることなくテーブルに案内される。このミロンガでは１週間前に「セステート・ミロンゲーロ」の演奏を聴いていたので、勝手がわかっており、生演奏が始まるまでの時間も気楽に過ごせる。午後11時きっかりに音楽が流れだすと、まず上手な人たちが踊り始める。初心者は目立つのを避け、ある程度混みだしてから踊りだす傾向がある。しばらくして飲み物の注文を取りに来る。どこのミロンガにも必ずバー・コーナーがあり、飲み物を提供している。ミロンガでの一般的な飲み物はビール、ワイン、ソフト・ドリンクで、発泡ワイン（シャンパン）もちらほら見かける。食事を提供するミロンガもあるが、ミロンガでの食事は一般的でない。たまにピザなどを注文しているくらいである。このパラクルトゥラルへ来る客の年齢層は平均して若く30代から50代が多い。一般にシニアーは早い時間帯にミロンガへ行く

傾向があり、若い人ほど遅い時間でのミロンガを楽しんでいる。開始から30分もするとフロアーは非常に混んできたので、我々も混雑に紛れてフロアーへ進む。ペアー当たりの踊るスペースは１㎡位しかないので、我々のような初心者はどうステップを取ってよいのか戸惑ってしまう。話には聞いていたがこれがブエノス・アイレスの人気ミロンガと実感する。それとなく踊ったり、休んだりしているうちに生演奏の始まる時間となる。

午前1：35にラ・フアン・ダリエンソ楽団がステージに登場する。ステージといってもフロアーの一角を楽団用のスペースにしただけである。９人編成の楽団はいきなり「Éste Es El Rey」の演奏に入る。最近のダンスの定番曲だけに、演奏が始まるなり客席から大きな拍手がおこる。マエストロのファクンド・ラサリをはじめ数人のメンバーは演奏しながら途中で声をかけたり、バンドネオン陣は蛇腹を大きく開いたり、ショーマンシップにあふれている。２曲目の「Felicia」の演奏が始まると踊りだすペアーが何組かでてきた。ミロンガのマナーとしては生演奏の時には楽団に敬意を表して、２曲くらいまでは踊らないで演奏をじっくり楽しむようであるが、ダリエンソ・スタイルの魅力は踊り手たちをじっと待たせておかない。３曲目の「ワルツ曲」になるとフロアーは踊る人達でいっぱいとなる。歌手フェルナンド・ロダスの司会で演奏は進む（写真右）。４曲目はこれもダンスの定番曲となっている「Paciencia」をフェルナンド・ロダスが歌う。この夜の楽団編成はピアノ、バイオリン（４）、バンドネオン（３）、コントラバスの９人編成で、ボリュームのある迫力を感じる。５曲目もフェルナンド・ロダスの歌が入る「La Última Copa」続いてインストで「Loca」、「ワルツ曲」、「El Marne」が演奏される。フロアーは大混雑であるが、我々もせっかくのチャンスを逃してはならないと「Loca」から３曲を踊った。できるだけ楽団に近いスペースを探して進み、演奏者を目の前にしながら演奏と踊りを楽しんだ。この後テーブルに戻り再びフェルナンド・ロダスの歌が入る「Quiero Verte Una Vez Más」、「Canzoneta」をゆっくりと聴いた後、プロ・ダンサーのダンス・デモが３曲、ダリエンソ・スタイルのリズムにのった切れの良いステップと華麗なダンスがくりひろげられた。我々はこの機会を惜しむように再びフロアーに行き、「Mucho Mucho」の心地よいミロンガのリズムにのり踊った。演奏は進み「La Cumparsita」に続き「Inspiración」で午前2：25にこの夜のステージは閉められた。司会者はこの楽団は2015年に日本公演をすることを紹介していた。楽団は若さにまかせて弾きまくるという感じを受けたが、特にミロンガの雰囲気に合わせて演奏者も踊る人達も一緒になって楽しんでいる。踊る人は非常に楽しめるミロンガの生演奏であるが、もしこの場に聴くだけの愛好家がいたらどんな気持ちで聴くだろうかとふと思った。帰り際ファクンド・ラサリと二言三言話をしてホテルへのタクシーを拾った。

会員アンケート

私の好きなChiqué 3曲選

第3回発表

池永 博威（東京都練馬区）

「チケー」は短調の曲だけれど私はあまり好きではありません。多分コッテリした曲だからかもしれません。だから、「チケー」を真面目に聴いたことはほとんどありませんでした。そんな訳で、この度「チケー」のベスト３を選ぶにあたって始めたことは「チケー」の演奏を探すことからでした。ＬＰまで手を広げると大変だったので、ＣＤ（主にAMPとCTA）から探すことができた　○フランシスコ･ロムート（1927)、○ロベルト･フィルポ（1928)、○リカルド･ルイス･プリグノーロ（1929)、○フランシスコ・カナロ（1929)、○マヌエル・ピサロ（1929)、○トリオ・アルヘンティーノ（1929)、○ペドロ・マフィア（1930)、○エドガルド・ドナート（1936)、○ロベルト･セリージョ（1940)、○フアン･ダリエンソ（1942)、○アニバル･トロイロ（1944)、○アストル・ピアソラ（1950)、○エドアルド・デル・ピアノ（1951)、○オスバルド・プグリエーセ（1953)、○ホアキン・ド・レジェス（1953)、○フランチーニ・ポンティエール（1953)、○フアン・カルロス・カビエージョ（1969）の17の演奏から選ぶことになりました。作曲者自身の演奏が一番この曲を表しているのは多分そうに違いありません。プグリエーセの演奏が群を抜いているのは異論のないところかもしれません。しかしコッテリの曲をコッテリ演奏されるのは！！！。ここではベスト３というよりも私の好きな「チケー」の演奏として次の３曲を選んでみました。どの曲も比較的アッサリ演奏されていて、ダンスを踊るのにも最適です。

① **フランシスコ・カナロ楽団**　**（1929年）**
② **エドガルド・ドナート楽団**　**（1936年）**
③ **フアン・カルロス・カビエージョとクアルテート・デ・オロ**　**（1969年）**

海江田 禎二（市原市）

私にとって、Chiquéの名演はOsvaldo Pugliese楽団演奏しか考えられません。唯一無二であり、他のどのChiquéを聴いても、この演奏との比較となり、最高の演奏はPuglieseしかないとの再認識に終わります。

１．Osvaldo Pugliese楽団　**1953年録音**

多くの感想を繰り返すより、一聴すれば、その魅力は全て分かるのではないかと思います。

公演の機会が少なかったこの時期、先鋭化されてきたPuglieseと楽団員全員のタンゴ演奏への思いがひときわ強く反映された演奏と思われます。この頃を含めた約10年間に録音された、ＬＰ用を含むタンゴは，前後を通じて本楽団の魅力が最大限に発揮されていると感じされられます。導入部から最後まで隙の入る余地のない緊張感が続き、聴き終わると、いつ聴いても何とも言えない感動に包まれる演奏です。

その後、本楽団は公演時、また録音でも再々 Chiquéを演奏していますが、本録音が最高と感じます。

佐藤　進（上尾市）

１．Orquesta Típica Francisco Canaro　（D.N. Odeon G: 1929）

タンゴを聴き始めてまもなくの頃、初めてカナロの演奏を聴き感激した記憶があります。タンゴ慣れしていない耳にも各楽器の素晴らしい音が伝わり、夢中になって聴きました。タンゴを好きになるきっかけとなった演奏です。

２．Osvaldo Pugliese Y Su Orquesta Típica　（Odeon G: 1953）

一人で聴いていると胸を締め付けられ、何か切なさを感じます。

３．Reynaldo Nichele Y Los Solistas Del Tango　（Microfon G: 1965）

名手４人が織りなすややモダンなチケは、ソロ・パートの見事なプレーが際立つ演奏です。何度聴いても飽きません。

西川　薫（さいたま市）

以下３曲、特に序列はありません。編成の大きい順に並べました。

１．フルビオ・サラマンカ楽団　1957年　東芝HV 1038

ピチカートを散りばめた全合奏に続く華やかなソロはcb. vn. pf. からbn.の終局部までプグリエーセとはまた違った光芒を放つ。１拍目、３拍目を強調したリズムがとても新鮮であった。

２．レイナルド・ニチェレ四重奏団　1965年　ポリドール SLPM 1338

挑発的な出だしから終局部のニチェレのソロまで陰影に富んだ好パフォーマンス。録音から50年経過した今もその理知的で節度のあるモダン性は色あせない。

３．ロドルフォ・メデーロス～ニコラス・ブリスエラ　2000年　ワーナー WPCR-19057

まるで自分一人のために目の前でバンドネオンを弾いてくれているような錯覚を覚える臨場感に富んだ録音で、夜更けに音量を絞ってウィスキーを手に耳を傾けるにはもってこい。

福川 靖彦（東京都墨田区）

この曲は古い時代の作曲（1920年）にもかかわらずモダンな感覚を持っていて、アレンジのし甲斐があるのでしょうか古来多くの楽団が取り上げています。どちらかというと大型楽団に向いている曲だと言えるでしょう。歌詞もあるようですがほとんど唄われないので無視することとし

て、さてインストゥルメンタルとなるとどうしてもオーソドックスですがO. プグリエーセに行き着きます。この演奏は麻薬的なところがあって、聴けば聴くほどまた聴きたくなる不思議な魅力をもっています。当然ダリエンソも録音していますが、あらためて聴き直してみると、スウィング感あふれる素晴らしい演奏です。しかも何ともバレラ的で、この時代のダリエンソを好きな向きにはこたえられない演奏になっています。これほどの名曲を一回しか録音していないのは何故でしょうか。この一二年またカナロに舞い戻ってきました。やはり1920年代末頃の演奏ということになるでしょう。カナロは当時としてはやや派手目に演奏していて、泣かせる演奏というわけには行かないようです。

思いつくまま取り上げてみましたが、三大オルケスタになってしまいました。小さなコンフントでは手に負えない大曲なのです。

宮本 政樹（東京都江戸川区）

「チケ」と言えばプグリエーセとサラマンカの演奏があまりにも強烈な印象で、現在に至るまで聴く機会は極めて多く、この二つの楽団は別格である。しかし名曲であるが故に多くの楽団が名演奏を残している。ペドロ・マフィア、デ・カロ、トロイロ、カナロ、エストレージャス・デ・ブエノスアイレス等は、捨て難い名演奏であるが、今回は第１回、第２回の３曲選に掲載されなかったものから選びました。

１．トリオ・シリアコ・オルティス　　Victor 60－2210Ｂ　1952年

第２回目の３曲選で鈴木一哉氏の選曲したシリアコ・オルティスの1939年録音（Víctor 38644A）はすばらしいと思うが､私はむしろ1952年の録音を取り上げたい。シリアコ･オルティスの奏法は装飾音を駆使したいわゆる「歌うバンドネオン」として類まれなセンティミエントを感じさせる。「歌の心」の持ち主であるが故に、ロシータ・キロガの「アポロヒア・タンゲーラ」の伴奏であれほどキロガの歌を際立たせているのが良い例である。この60-2210Ｂの演奏では中程でギターのビセンテ・スピナに主旋律を弾かせ、自分は伴奏にまわるこのコンビネーションは絶妙である。

２．フランシスコ・ロムート　　Odeon 7722　1927年

全体としては地味で、落ち着いた静かな（トランキーロ？）演奏。ロムートにしては力強いか。ペドロ・マフィア、デ・カロ、カナロの最終の16小節ではそれぞれが当時の３大バイオリン奏者であるエルビーノ・バルダロ、デ・カロ、カジェタノ・ブグリッシがソロ演奏を競っているが、このロムートではレオポルド・シフリンの最後の16小節のしみじみとした泣き節はこの３大バイオリン奏者（もう一人フェラサーノも入るか？）に勝るとも劣らない味わいのあるセンティミエントがある。

３．トリオ・アルヘンティーノとオルケスタ・ティピカ・アルヘンティーナ　AE2408　1929年

ヨーロッパの香りがする上品な演奏。楽団演奏は６人から８人か？　中盤から終盤にかけての各16小節ごとのバイオリン（フェルナンデス？）のソロ演奏が中・低音と高音の二つに分けて変化を持たせて演奏しているところが良い。

新・訳詩コーナー

大澤　寛

Maipo（マイポ）

Letra : Gabriel Clausi　　Música : Eduardo Arolas

俺のところに帰って来いよ　古い思い出よ
光の輝きを連れて
旧いシャンデリアの
いつも変わらぬ煌きは星のようだ
もう一度　夜が来たら　震わせてくれよ
あの愛の夢を　昔の歌を
遠い昔のこの舞台で跳ね回る影を

俺の夢の　ガラス張りの屋根
限りない色の輝き　彫像のような姿
もう忘れられた名前
時は過ぎ　想い出に混じる苦しみ
あれほどの愛に包まれて残る
過ぎた事どもの味わい

*昔のマイポ劇場*は見ていた*
優しさに満ちたあの日々の光の下で
俺たちがうっとりと愛の夢を見るのを
心の底から　夢の全てと
この言葉と　この悲しいタンゴで
お前に語りたい　俺が心に秘めていた
俺が生きたように　興奮に満ちた
あの俺の町の劇場のことを

＊小さな町に映画館があった時代の“我が町の映画館・劇場”のひとつだろう。
この歌詞の語り手の初恋が生まれた場所だったかも知れない。
海江田さんの「私の愛聴曲Maipo」にリンクさせたものです。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

◎関西リンコン　日　時：５月24日（日）
　　会　場：「サロン・ド・あいり」

◎東京リンコン　日　時：５月26日（火）
　　会　場：「原宿クリスティー」

◎中部リンコン　日　時：６月28日（日）
　　会　場：伊勢市河崎「かどご座」

◎セミナー　日　時：６月14日（日）
　　会　場：「東医健保会館」

会員動静　（2015年４月20日現在　183名）

入会者

高田幹雄（大阪市）　平田歌代子（東京都）　佐々木　稔（堺市）　勝俣秀夫（さいたま市）

退会者

佐藤之郎（東京都）　山下よし子（東京都）　廣嶋紀通（神奈川県）　加藤光男（小樽市）
平田耕治（横浜市）　荒田孝宏（東京都）　大岩　功（東京都）

次号の原稿締め切り日

Tangueando en Japón（2015年７月発行）：2015年５月31日
Tangolandia（2015年10月発行）：2015年９月15日

編集後記

気温の上下の激しい日々が続きました。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか？

皆様のご協力で2015年春号も内容の濃いものとなりました。ただ財政面の事情から紙数の拡大は望めず、苦しい編集となっております。「私の好きなChiqué ３曲選」アンケートに引き続きご応募をお願いいたします。３曲でなくても結構です。近況などを付け加えて頂くのも大歓迎です。（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品）　第30号　2015年4月 発行

発　　行：日本タンゴ・アカデミー
〒156-0044　東京都世田谷区赤堤２－32－14－104（飯塚方）
電話＆FAX 03-3324-1989　E-mail　iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編　集　部：大澤　寛（編集長）〒162-0051
東京都新宿区西早稲田２－１－23－609
TEL 03-3208-2247
E-mail　hdomingo@bc4.so-net.ne.jp
齋藤冨士郎・弓田綾子・宮本政樹・島﨑長次郎

編集サポーター：池永博威・笠井正史・鈴木啓子

表紙デザイン：脇田冨水彦

印　　刷：株式会社　藤印刷　〒102-0072
東京都千代田区飯田橋２－13－１